現代青少年の生活態度と価値観

——高校生・勤労青少年に対する調査から——

浜　口　恵　俊

Ⅰ　青少年の生活構造研究の意義と方法——理論仮説——
1.　青少年期の社会学的特性—不確定性—
2.　青少年の生活構造の動的性格と生活組織化
3.　現代社会における青少年の生活組織化とその挫折—非行化との関連性——
4.　青少年の生活組織化研究の方法論的意義
Ⅱ　現代青少年の生活態度と価値観—調査の結果とその分析—
1.　調査の方法
2.　調査の作業仮説
3.　調査対象者の特性
4.　各生活機能局面における態度と価値
A．人的環境への適応
B．生活目標の達成
C．規範への同調と一般的生活態度
D．欲求充足と経済観念
5.　調査のまとめと問題点

Ⅰ　青少年の生活構造研究の意義と方法——理論仮説——

1　青少年期の社会学的特性——不確定性——

一般に青少年期 (adolescence) が，個人のライフ・サイクル上のどの期間に相当し，またどのような特性を有するかは，一義的に規定し難い。第一に，青少年期の諸問題に対する研究的ないしは実践的接近法の違いによって，そのインプリケーションを異にする。[1] 第二に，法律上も青少年の年令規定は一定していない。[2] 第三に，青少年期の持つ社会的意義は文化相対的に規定さ

1)　例えば，生理学的観点からは，青少年期は，第二次性徴の発現に始まり，大人としての身体的機能が整うまでの期間であるし，また発達心理学視点からは，生理学的成熟と平行した，異性への関心の増大・自我意識の確立・理想主義的傾向・心理的離乳・情緒的不安定，等によって特徴づけられる，いわゆる思春期を指している。教育的観点から「青少年問題」という時の青少年期は，主にティーン・エイジを意味する。また以前の日本の農漁村では，青少年期は，年令集団としての「若者組」「青年団」のメンバーシップを保持しうる，結婚にいたるまでの一定の期間，として理解されることが多かった。

2)　例えば，少年とは，少年法では「二十才に満たない者」(第二条)，児童福祉法では「小学校就学の始期から，満十八才に達するまでの者」(第四条)をいう。労働基準法で年少者年令証明書を必要とする者は，満十八才以下である（第五十七条)。民法においては，「満二十年ヲ以テ成年トス」(第三条）とあり，また刑法上の責任が生じるのは，満十四才である（第四十一条)。青少年を法律的に，少年または未成年者と解する時，このようにその年令の上下限は一定していない。

れ，民族毎に多様性を示す。[3]また同一社会においても，青少年の地位—役割体系は，時代的ないしは世代的に相異なる特徴を持つ。

しかしながら社会学的視角から眺めると，このような「青少年期」の不確定性は，根本的には，青少年が子供と大人との中間的存在ないしは成人に至る過渡期的存在である，というその本質に由来するものなのである。ホリングスヘッドによれば，「青少年期とは，ある人の機能する場としての社会が，その人（男性もしくは女性）を，子供とみなすことは止めはするが，それに完全なる大人の地位・役割・機能は附与していない，人生上の期間である」[4]とする。要するに青少年期というのは，特定社会が，年令的に子供と大人との中間に位置する成員の地位に対して，期待し，許容し，強要し，禁止するところの，諸役割によって規定される，ライフ・サイクル上の一定期間である。この中間的成員に対して，社会の側（特に両親・教師に代表される大人）から期待される諸役割は，しばしば一貫性を欠き，また互に矛盾する場合が少なくない。[5]青少年自身の立場からいえば，それは，自己の行為のフレイム・オブ・レファレンスを容易に確定せしめえない，ということである。つまり彼らは，自らの行為に必ずしも十分な自信を持ちえず，ある状況下では依然として大人（親）に依存的であり，またある場面では保護者から独立した自分たちだけの行態（Verhalten）を示そうとする。再びホリングスヘッドの表現に従えば，「青少年はもはや子供ではない。しかしまだ大人の社会的・法的・経済的地位には到達していない。彼らは，疑似子供（quasichild）として，だがしかし同時に疑似大人（quasiadult）として，多くのジレンマに直面する。」[6] 青少年のこうした社会的存在は，時に境界人（marginal man）と呼ばれることがある。そうした彼らに対するあいまいな役割期待は，彼ら自身のとまどった行為志向と両両相俟って，青少年期というものを，不確定な人生期間たらしめている，といえよう。

尤も，このように青少年期の不確定性の意味を，青少年の行為様式に対する社会的期待の中間性・不明確性に求める場合，成程それは不確定の必然性を説明するであろうが，しかし必ずしも，どのようにどの程度不明確であるか，あるいは，その不明確性がどのような問題を招来する

---

3) ハヴィーガーストは，「青少年期，すなわち幼年期から成人期への過渡期は，生物学的常数（biological constant）と文化的変数（cultural variable）とから成る」（R.J. Havighurst, "How We Postpone Youth's Coming of Age," *in* R.M. MacIver *ed.*, Dilemmas of Youth : In America Today, 1961, p. 5.）と述べ，また前田嘉明も「……青年の位置づけは社会のありかた，また当該社会の文化-歴史的構造から決まってくるのである」（前田嘉明，「性」，岩波講座，現代教育学16，青年の問題，昭和36，121頁。）と指摘している。このように青少年期が文化相対的に規定されるということは，サモアにおける平隠な思春期の推移を報告した，マーガレット・ミードによるまでもなく，明らかであろう。（cf. M. Mead, Coming of Age in Samoa, 1930.）

4) A. B. Hollingshead, "Some Crucial Tasks Facing Youth : Problems of Adolescence, Peer Group, and Early Marriage," *in* R. M. MacIver *ed.*, Dilemmas of Youth : In America Today, 1961, p. 15.

5) 青少年に対する役割期待の相互矛盾性は，次のような，記者と日活スター，田代みどり（当時13才）との一問一答の中に，見事に象徴化されている。

(問)——「オトナのいうことは気になる？」

(答)——「前はならなかったけど，いまはちょっとしたことでも，すごく気になる。オトナって勝手だもの。おかあちゃまだって，朝起こす時なんか，〝子供じゃないでショ〟，何かあると〝子供なんでショ〟」（毎日新聞，36・12・9）

6) A.B. Hollingshead, *op. cit.*, p. 19.

のか，ということを明らかにするものではない。この立場においては，青少年期は，シェルスキーにおけるように，もはや子供としての役割は演じないが，しかし一人前の社会人としての役割を果すには到らない時期，[7]だと消極的に規定されるにすぎない。これは，青少年期を，客体的立場から，適応(adaptation) 上の問題として把握しようとするところに，その一因が存する。他方これに対し，不確定な青少年期の内容性・問題性をより明白にするという観点から，主体的立場において，より積極的に青少年期の基本的性格を捉えることが要請されるであろう。では，それはどのような把握となるだろうか。次にその問題について考えてみたい。

2　青少年の生活構造の動的性格と生活組織化

フリーデンバーグはいう。「青少年期はたんに身体的な過程なのではない。そこには性的成熟以上のものが存在する。それはまた――しかも根本的には――一つの社会過程なのであり，その基本的な課業は，明確なしかも安定せる自己確認 (self-identification) ということである。」[8]このように青少年期を，より積極的に，自己規定的課題を背負った社会文化的学習の過程として，青少年自身の主体的立場から理解しようとする際，その社会過程を，いったいどのようなものと考えればよいであろうか。

この場合にも，しかしながら，青少年期の不確定性が消滅するというわけではない。依然として青少年は，自己の不確定的存在を意識せざるを得ない。だが前の場合におけるように，たんに中間的存在者としての適応行動の構造が不確定なのではない。むしろ子供から大人への過渡期にあって，その社会的存在性の本質が根本的に転換されるという意味において，不確定なのである。つまりこの立場では，青少年は，幼少期における保護依存的存在から，成人期の独立自営的存在への移行者として捉えられる。換言すれば，幼少年期に主に家庭にあって，身体的・心理的・文化的に保護育成される，いわば社会的に「つくられる」側にあった者が，家族外の学校・職場・地域社会・各種の団体などの社会諸集団に参加することによって，社会的人間として独立し，今度は社会を「つくる」側のメンバーへと移行する，そうした時期が青少年期ということになる。[9]さらに言葉を変えれば，養育家族 (family of orientation) 成員から再生産家族 (family of procreation) 成員への転換の準備期だと言えるかもしれない。

かかる社会的存在性の本質転換が，生活構造の一大変動を必然化することは，いうまでもない。ここに青少年の生活構造の極めて動的な性格が見られるのであり，われわれとしても青少年期を，基本的な生活構造の変動期として眺め，かつその変動過程を一つの社会過程として分析する必要が出てくる。その場合に分析のための操作概念 (operational concept) として有用となるのは，恐らく個人の生活組織化 (life organization) という概念であろう。なぜなら，社会と自己とを「つくる」側への移行過程である青少年期というものは，言い換えてみれば，その生活の

7) H. Schelsky, Die skeptische Generation, eine Soziologie der deutschen Jugend, 1958, SS.15-16.
8) E. Z. Friedenberg, The Vanishing Adolescent, 1959, p. 1.
9) 桑畑勇吉，「都市青少年の生活目標と『自己疎外』」，大阪市立大学家政学部紀要，第8巻，昭35，154頁。

組織化（より正確には，再組織化）の過程に他ならないからである。

生活組織化とは，桑畑勇吉の定義に従えば，「社会化と個別化の両過程をへながら，さまざまの集団参加によって，社会からつくられながら社会をつくりいく関係を保持していくこと」[10]である。すなわち，「社会化された個人が社会参加を通じて社会的手段を個別的に選択，摂取し，自己の生存のための要求と社会の存続のための要求を充していくために行う行動過程」[11]のことである。より抽象的な表現を用いれば，個人が身体的・心理的諸要因に規制されつつも，個人的特質を育成していく場的条件としての個人の生活の場そのもの，つまり個人ごとに異なる日常生活の経験的行動の累積，を意味する。[12]ブラウンでは，身体的・社会的伝承物を個人のユニークな経験を通して人間性の中に取り入れる過程，として規定されている。[13]

この生活組織化という概念は，すでに旧くタマスとズナニエッキーが，その著『ヨーロッパとアメリカにいるポーランド農民』の中で用いている。その定義するところに従えば，個人の生活組織化というものは，「彼の生活の中で，多かれ少なかれ組織化された態度の，部分的な原因としても，また部分的な結果としても，主たる役割を演じるところの，限定された数の，選択され組織された社会的価値（social values）のグループが，彼の体験領域の内部に存すること」[14]を指し示す概念だとする。さらにこれを敷衍していう。個人がその生活組織化を構築する上で直面する問題は，個人的体験の安定化，すなわち個人が制御すべき（社会的）現実の領域内に或る種の多少は永続的な秩序を実現することである。しかもその安定化は，類似せる物的環境の下で同一行為を反射的に反覆する傾向としての習慣（habit）によってではなく，新体験のより意識的ないしは有目的的な規制（regulation）に依存する。一般に同一の社会的状況が反覆されることは少なく，それはたえず更新される。したがって個人は，過去状況と完全に似ているような既製状況（ready situations）を受動的に見出すというわけには行かず，新しい状況を過去状況に似せて意識的に規定することが必要になる。その際に用いられる諸状況の一般的スキーム，すなわち状況規定（definition of situation）のためのルールのセットが，生活組織化と呼ばれるものなのである。そうしたスキームとしては，道徳律，法規，宗教儀礼，社会慣習，等がある。[15]

さらにまた続けていう。尤もそうしたスキームは，多くの場合，教育によって個人に注入せられた，あるいは社会から課せられた状況の規定の仕方であるが，しかし生活組織化の構築過程が，そのような受動的なものだけでないことは固よりである。個人自身の手によって，既存の態度と適合しながらも，新しい不明確な状況を，客観的データの知的分析と，行為の中で初めて顕

10) 桑畑勇吉「生活組織化の論理——社会病理学の諸問題(3)」，大阪市立大学家政学部紀要，第5巻，昭33，112頁。
11) 桑畑勇吉，前掲論文「生活組織化の論理」，113頁。
12) 桑畑勇吉，前掲論文「生活組織化の論理」，104頁。
13) L. G. Brown, Social Pathology, 1942, p.8.
14) W. I. Thomas and Znaniecki, F., The Polish Peasant in Europe and America, 1918-1920 (1958 *ed.*), p. 1843.
15) W. I. Thomas and Znaniecki, F., *op. cit.*, pp. 1851-1853.

在化・明白化されうるような新しい自己の態度の確定とによって，規定する，といった創造的な形成過程が存することも，また忘れられてはならないのである。[16]

以上のように，タマスらにおいては，生活組織化という概念は，状況規定との密接な連関において，個人の体験領域の中に組織化された持続的態度ないしは価値の体系として理解せられた。このことは，一つの生活行動的ないしは生活体験的過程としての生活組織化が，より操作的な観点からは，個人の動態的状況の規定における態度確定ないしは価値形成の過程として，分析されうることを示唆する。かくてエリオットとメリルは，社会参加によって単なる個体（individual）から社会的人間（person）となった個人が，その社会的経験を通して一定の価値と態度の構造を得，それによって意識的ないしは無意識的に自己の基本的生活目標を達成しようとする場合，その価値と態度の構造に対して生活組織化というタームを与えている。[17] 要するに生活組織化とは，個人が自己の独自的な社会的経験によって習得・形成した一定の価値・態度体系（value-attitude system）を基盤にして，その生活目標を達成しようとする行動過程（社会過程）だといえよう。

3　現代社会における青少年の生活組織化とその挫折—非行化との関連性—

いまわれわれは，青少年の生活構造を社会過程として動的に分析するために，生活組織化という一つの操作概念を導入したのであるが，この生活組織化を，青少年個々の体験から形成された価値・態度体系に基底をおく，目的達成的生活過程として理解する際，それは現代社会においてどのような意義を持つであろうか。

先にも述べたように，青少年期が，被造性から創造性へという生活構造の根本的転換が行なわれる，ライフ・サイクル上の一時期だとすれば，その転換過程，つまり生活の（再）組織化過程は，現代社会において必ずしもスムースには展開しない。なぜなら，第一に，産業化の急速な進展に伴って，青少年の第一次集団から第二次集団への進出・移行が困難となるからである。すなわち，青少年は，学校を了え家を遠く離れて職に就くとすれば，それまでの暖かいパーソナルな人間関係にくるまれた家族という私的生活環境から，冷たい非人間化された，あるいは匿名性につつまれた機能的人間関係の支配する公的生活領域へと，直接的に移行することを余儀なくされ，大人の世界でのあまりに異端的な体験に不安ととまどいのみを感じ，また相矛盾する二つの行動原理の間で多くの葛藤を引起こさざるを得ない。[18]第二に，こうした傾向は，さらに大衆社会化

16)　W. I. Thomas and Znaniecki, F., *op. cit.*, pp. 1871-1875.

17)　エリオットとメリルは，個人の生活組織化について，次のように述べている。「個人の生活組織化は，自分の社会的経験から生成されるところの，そして自分の生活を意味深いものにしたいと，意識的にあるいは無意識的に思う場合におかげを蒙るところの，態度，価値，目的，目標，地位，役割のパターンとして規定されよう。彼の生活組織化は，道徳，法，社会関係，宗教，業務，リクリエーション，愛情，結婚などの諸領域における，彼自身の指導準則のセット（his own set of rules for guidance）である。そうした準則は，彼がそれぞれ特定の状況を規定しようと試みる際にその手段ともなるところの，ある一定のその人の規範と価値の具現体である。」（M. Elliott and Merrill, F., Social Disorganization, 1934 (1961 *ed.*), p. 47.

18)　H. Schelsky, *op. cit.*, SS. 30-37.

の拡大によって拍車をかけられ，多くの青少年は自己の生活の実存的基盤を見失い，また達成すべき独自の生活目標を確立しえず，ただ大衆的な共通目標を安易に志向するにすぎなくなる。したがって，主体的に社会を新たにつくり出そうとする積極的・建設的姿勢も，必然的に失われることになる。すなわちその生活組織化は，社会全体のアノミー的状況と個人の自己疎外的傾向とによって，弱化を招来するのである。第三に，日本社会では，特に親と子との間の世代的断層，ないしはリフトンのいう historical dislocation[19]が顕著に存することもまた，理想的人間像の相違をもたらすものとして，さらには世代間の相互不信感を惹起するものとして，青少年の生活組織化に対して逆機能を果たす結果となる。第四に，現代社会はいうまでもなく社会文化的変動の激しい社会であり，全体社会の構造・機能的変動に伴って，青少年の生活態度と価値観もまた，安定化しえない。特にその価値体系は，統合性・方向性・評価性という本来的機能[20]を有効に発現しえなくなり，合理的認識力と生活指針と倫理的感覚とを，青少年から喪失せしめる。このこともまた，彼らの生活構造転換を困難たらしめているのである。

このような種々の理由によって，自己の生活組織化を円滑に進ませることに難渋しがちな現代日本の青少年は，さらに，巨大な大衆社会の下での将来の見通しが不確かなことに由来する不安と，学歴尊重的社会構造の制圧から来る欲求不満と，第三次産業の拡大の直接的反映として生じる欲望肥大症とによっても，悩まされ続けている。そこで家庭や学校や職場におけるちょっとしたことがらについての不満を導火線として，彼らが反抗的・反社会的行動へと走ることが次第に多くなって来ている。いわゆる理由なき衝動的犯罪や非行などの典型的な社会病理的現象が，青少年において最近顕著に増加しつつあることは，[21]彼らの生活組織化の挫折の著しさを示すものに他ならないのではなかろうか。つまりそれらの社会病理現象は，生活の非組織化（life disorganization）と同義だといえそうである。いわゆる「ぐれる」という言葉は，たんに「非行化する」というコンノテーションを持つ以外に，こうした生活組織化過程の阻害という，一層広いインプリケーションをも持つものと考えられる。というのも，桑畑がいうように，生活組織化の本質は，個人の実存的価値追求の志向にあり，したがって彼がその実現に主体的に立ち向うとき，初めて彼は自らの社会的存在理由を見出し，さまざまな困難に直面しながらも，うまずたゆまず日常生活の努力を続けて行くものなのだ，[22]からである。

---

19) R.J. Lifton, "Youth and History, Individual Change in Postwar Japan," *Dædalus*, Winter, 1962, pp. 173-181.

20) 桑畑勇吉「非行対策のための地域活動と社会的価値」，大阪府青少年問題協議会編，「青少年非行に関する研究報告書（昭和37年度）」，昭39，52—53頁。

21) 全国の刑法犯少年（14才未満の触法少年を含む）の数を，昭和31年と40年とで比較すると，31年に127,421人だったものが，40年には234,959人に増加している。前者の指数を100とすると，後者のそれは，実に184に達する。成人では，31年を100（実数427,192人）とした場合，40年には121（実数515,963人）という指数を示すにすぎない。なお40年の全刑法犯少年の内訳は，勤労少年104,008人(44.3%)，高校生39,242人（16.7%），中学生66,449人（28.3%），小学生19,782人（8.4%），その他の学生・生徒5,478人(2.3%)である。(総理府青少年局編，青少年白書（1966年版），昭41,246,258頁。)

22) 桑畑勇吉，前掲論文「生活組織化の論理」，112頁。

かくて，非行化傾向の増大といった点に最大の問題点を孕む，現代社会の青少年の生活構造の分析にとって，その生活組織化の実証的究明は，極めて重要な基礎理論としての意義を持ちうることになる。つまり一般に青少年問題といわれている一つの研究的・実践的課題に対して，生活組織化の解明は，有効な理論的解答を用意することになろう。そこで次に，青少年の生活組織化を追究することの研究方法論的意義についても，いくらか詳しく述べておきたい。

4　青少年の生活組織化研究の方法論的意義

非行化現象についてのこれまでの社会病理学的研究は，主にその病態論的追究に終始していたように思われる。すなわち，非行少年の置かれていた社会的環境と個人的人格特性の分析を通して，非行化を解明することが普通であった。例えばウェインバーグは，居住地域・生活様式・階層・家族形態・民族集団，等の社会的諸要因（social factors）と，体格・気質・知能，等の個人的諸特性（personal traits）との二側面からの接近を試みている。[23] そしてこれらの諸側面に関する非行少年と一般少年との比較から，非行化の原因が推測されるのが通常のやり方であろう。成程，この接近法は，非行の社会文化的並びに個人的背景を明らかにはする。だがしかし，それが非行化過程の進行因を真に明らかにするものだとは言い難い。

例えば，ある地域社会の非行率が高いからといって，その地域の諸特性それ自体をもって，そこにおける非行化の原因とするわけにはいかない。その地域には非行を犯さない数多くの一般少年が居るからである。しかしまた仮りに，同一地域におけるあるいは同一階層内の，非行少年と一般少年との社会文化的ないしは個人的特性の比較から，両者間の差異が明白になったとしても，それは，本来非行化との何らかの連関性を示すだけであって，他の諸条件がはっきりしない限り，必ずしも非行の原因を明示するような因果関係を説明するものではない。もし調査時点が当該非行の後であるとすれば，明らかにされたその少年の個人的・家庭的・地域社会的事情は，実際は非行化した後の結果的状況を示すものであるかもしれず，その資料は非行の病因論的追究に対しては，真の有効性を持ちえない場合も多いであろう。病態の観察からのみ病因を正しく推定するのは，まさに熟練医の天才業のようなものであって，決して方法論的に一般化しえないのである。したがって病因の科学的追究は，病理学それ自体の方法によらねばならない。こうした意味で生活組織化という用具概念は，非行化の病態論ならぬ病因論的解明に対して，大きなアヴェイラビリティーを持つであろう。なぜなら，それは，青少年が，直面する生活上の困難な諸条件に対して，いかなる主体的態度と社会的価値とをもって対処するか，を明らかにする概念であって，したがってまたその挫折過程の分析こそが，逆に非行化の病因ないし病理を正しく提示する可能性を持つからである。

このように生活組織化は，青少年問題に対する従来の病態論的接近法を病因論的接近法へとレベル・アップするが，その研究方法論的意義は，このことだけに止まるものではない。時系列的

23) K. Weinberg, Social Problems in Our Times, 1960, pp. 119-137.

視点からいえば，両接近法共，過去から現在にかけての問題性を明らかにする。特に後者は，過去に分析の拠点（point of reference）を置くところの因果関係（causality）を解明するものである。ところで桑畑が注意するように，「青少年の生活行動は，従来のようにたんに過去の生活歴や現在の生活環境との関連のもとに観察分析されるだけでなく，時間的な未来への方向づけによっても，彼等の生活行動が規制されていることを私達は見逃してはならない」[24] とすれば，さらにわれわれは未来的観点からも，すなわち，青少年がいかなる態度と価値とに基づいて未来を志向するか，あるいは時間的未来に存する生活目標を達成するために現在いかに行為するか，といった視角からも接近する必要が出てくる。

さて未来に分析の拠点をおくところの，逆方向の因果関係（未来からの因果の逆帰属という意味ではなく，過去と未来とを，現在時点に関して互に対称的でたんに正負の符号のみを異にする，相互転換可能な二時点と考え，マイナスの過去としての未来と現在との因果関係という意味においてである）を，小室直樹に従って目的論的関係（teleology）と称するならば，[25] 桑畑の要請するような未来的観点からの研究方向は，青少年の生活構造の目的論的な接近法だと性格づけられよう。先にも述べたように，青少年期の本質を，「つくられる者からつくる者へ」という社会的存在の転換に求めるとすれば，彼らの創造性・生産性への移行という生活特性は，まさしくこうした目的論的接近法に適合するものなのである。こうした意味においても，未来的生活目標とのからみ合いにおいて現在の生活構造を問題とする生活組織化の概念は，これまでの研究とはその時間的方向性を異にすることによって，新たなる分析視角を開くものと考えられる。

こうした考察から，われわれは，生活組織化が，その逆機能的局面，すなわち生活の「非」組織化過程に関しては，因果論的接近法に対して，またその順機能的局面たる組織化過程に関しては，目的論的接近法に対して，それぞれ重要な研究方法論的意義を持つと結論づけることができる。

以上において，青少年の生活構造を分析するための理論的な諸問題を検討し，かつそのための用具概念としての生活組織化の方法論的意義についても論じた。ところで既述のように，生活組織化は，操作的には，個人の価値・態度体系を通じて分析される。そこでわれわれは，調査によって現代青少年（高校生および勤労青少年で代表させた）の生活態度と価値観を実証的に研究し，そこから彼らの生活組織化状況，ひいてはその生活構造の実状を探り出すことを試みた。以下はその調査結果の分析である。

---

24) 桑畑勇吉，前掲論文「都市青少年の生活目標と『自己疎外』」，154頁。
25) 小室直樹，「社会動学の一般理論構築の試み」，思想，No. 508, 1966, 10月号，18-19頁。

II　現代青少年の生活態度と価値観

——調査の結果とその分析——

1　調 査 の 方 法

前章Ｉで述べた調査の理論仮説と，後に説明する作業仮説は，本研究が開始された昭和39年４月以来，別記の分担研究者と研究協力者の間で継続的に行なわれた討論を通じて準備された。40年夏からは，それに基づいて調査票が，数次のプリテストを経て作製された。調査票は高校生用と勤労青少年用とに分れており，各二枚構成である。配票調査法による配布・回収が，41年２～３月に行なわれ，引続いて集計と分析とがなされた。

高校生については，京都市の南部地区（自営の中小企業・商店が比較的多い下町的な地域）を通学区域とする市立Ｔ高校（普通科のみ）の二年生全員に対して実施し，13クラス合計611通の集計可能な調査票を回収した。配票・回収はクラス担任を通じて行ない，記入はホームルーム時間になされた。一方，勤労青少年については，京都市内の西南部に在る四つの中小企業の独身従業員（26才以下）合計約320名を対象に，各会社の労務担当課を通じて配票と回収を行ない，集計可能な調査票310通を得た。その内訳けは，工具製造の KY 機械工具株式会社（102通），パン製造の KS パン株式会社（47通），電気器具製造の KR 電機株式会社（97通），染色用図案型紙製造の株式会社Ｓ紙芸（64通）であった。単純集計は各企業体毎に行なったが，本論文では勤労青少年として一括した合計値のみを示すことにする。この場合，企業体間の分布差は，仮説の検証にとって特に有意義だとは考えられないからである。集計は，両調査票ともに，各問についての単純集計を行なった他に，問題間ならびに問題とフェイス・シートとの間でクロス集計を行ない，その大部分のものには χ^2 検定を加えた。集計に際しては，レミントン製電気集計機が用いられた。

なおこの調査は一般青少年を対象としているが，現代青少年の生活構造の問題点をより明確に分析するには，非行少年を統制群にして，その資料と比較することが望ましい。本調査においても，研究協力者によって若干の非行少年に対する面接調査が行なわれたが，比較材料とするにはサンプル数が小さすぎたため，本報告に用いることは残念ながらできなかった。本調査票を用いての非行少年に対する本格的な調査は，いずれまた改めて実施したいと考えている。

2　調査の作業仮説

調査票は，調査対象者のフェイス・シート的特性についての問に加えて，青少年の生活構造の四つの機能局面に関する諸問題からなる。高校生用と勤労青少年用とでは，若干設問とその内容（解答選択肢）を異にするが，機能局面については共通している。すなわち，(1)人的環境への適応，(2)生活目標の達成，(3)規範への同調，(4)欲求充足，の四局面である。これらの機能局面は，

パーソンスのＡＧＩＬ理論における各局面にほぼ対応するものであるとともに，また作田啓一の提起する社会体系の四つの機能要件，すなわち，(1)適応，(2)外的接合（目標達成），(3)合致，(4)内的接合（欲求充足），[26] と見合った，人格体系レベルにおける機能局面だともいえよう。青少年はこれらの生活機能局面のそれぞれにおいて，各自の生活態度と価値観を形成しつつ，自己の生活目標の達成を目指して，生活構造の組織化に努めるものと考えられる。そこで本調査は，これらの各機能局面における彼らの生活態度と価値観を分析することによって，その生活組織化の状態を理解しようとする。本調査の対象たる一般青少年では，全体的にみれば，その生活組織化は，若干の問題点を孕みながらも，比較的健全であることが予想される。以下，調査対象者の諸特性の記述に続いて，各局面における特徴――各局面ないしはその部分面のいずれにおいて生活組織化が比較的うまく行っており，またいかなる条件の下で組織化の程度が低くなりそうか，など――を，順次に明らかにして行きたい。

3　調査対象者の特性

被調査者のフェイス・シート的特性を，年令・学歴・性別・保護者構成・家業・きようだい構成・居住形態・職種（仕事内容）・就業年数・転職回数，についてみると，第１表～第10表のようになる。

年令構成では，高校生は対象が二年生であるため，17才が約八割を占め，勤労青少年は，高校生に相当する16・17才が17％，ハイティーンの18・19才が26％強，20～22才の成人青年が合わせて40％，という割合になっている（**第１表**）。これは，**学歴**において勤労青少年の大半が，中学卒（43％）および高校卒（35％）であることからすれば，当然の結果であろう（**第２表**）。**性別**では，男女比が，高校生・勤労青少年とも，約二対一となっている（**第３表**）。**保護者の構成**をみると（**第４表**），実父・実母とも健在の者は，両群とも圧倒的に多いが，高校生の方が15％以上も大きい。逆に「実母のみ」は，勤労青少年の方が，高校生の約三倍の21％弱を示す。これはいうまでもなく，父がいなければ，青少年自

第１表　年　令（％）

年令	高校生	勤労青少年	計
16才および16才以下	90 (14.73)	23 (7.42)	113 (12.27)
17才	508 (83.14)	31 (10.00)	539 (58.52)
18才	8 (1.31)	39 (12.58)	47 (5.10)
19才	1 (0.16)	44 (14.19)	45 (4.89)
20才	0	40 (12.90)	40 (4.34)
21才	0	51 (16.45)	51 (5.54)
22才	0	33 (10.65)	33 (3.58)
23～26才	0	30 (9.68)	30 (3.26)
不明，その他	2 (0.33)	3 (0.97)	5 (0.54)
N.A.	2 (0.33)	16 (5.16)	18 (1.95)
計	611 (100.00)	310 (100.00)	921 (99.99)

26）作田啓一，「行為理論と体系理論」，思想，No. 498, 1965, 12月号，115頁。

ら働かざるを得ないからである。**家**（保護者）**の主職業**においては，自営商工業者・一般サラリーマンは高校生の方に多く，他方，農・漁民や体を動かす仕事に就いている者，その他の職業を持つ者は，勤労青少年の方に多くなっている（**第5表**）。またこの表から，農漁村出身の勤労青少年が二割弱いることも判る。高校生の**きようだい構成**は**第6表**の通りであるが，男女間で分布比率にあまり差はない。独り子は，女子高校生の方がやや多いが，ともに10%以内である。勤労

第2表　学　歴（勤労青少年）

学歴	実数	%
中学在学中	1	0.32
中学卒業	134	43.23
高校在学中	20	6.45
高校中退	11	3.55
高校卒業	109	35.16
大学在学中	2	0.65
大学卒業	1	0.32
短期大学卒業	1	0.32
不明，その他	6	1.94
N.A.	25	8.06
計	310	100.00

第3表　性　別（%）

性別	高校性	勤労青少年	計
男	379 (62.03)	194 (62.58)	573 (62.21)
女	231 (37.81)	101 (32.58)	332 (36.05)
不明	1 (0.16)	15 (4.84)	16 (1.74)
計	611 (100.00)	310 (100.00)	921 (100.00)

第4表　保護者構成（%）

保護者	高校生	勤労青少年	計
実父・実母	523 (85.60)	216 (69.68)	739 (80.24)
実父のみ	15 (2.45)	6 (1.93)	21 (2.28)
実母のみ	45 (7.36)	64 (20.65)	109 (11.83)
継父・実母	2 (0.33)	4 (1.29)	6 (0.65)
実父・継母	11 (1.80)	11 (3.55)	22 (2.39)
その他(おじ，おば)	1 (0.16)	1 (0.32)	2 (0.22)
その他(兄・姉)	3 (0.49)	3 (0.97)	6 (0.65)
その他(養父母)	2 (0.33)	1 (0.32)	3 (0.33)
〔その他小計〕	〔6〕 (0.98)	〔5〕 (1.61)	〔11〕 (1.19)
不明・その他	7 (1.15)	2 (0.65)	9 (0.98)
N.A.	2 (0.33)	2 (0.65)	4 (0.43)
計	611 (100.00)	310 (100.01)	921 (100.00)

第5表　家(保護者)の主職業（%）

職業	高校生	勤労青少年	計
農業・漁業	26 (4.26)	54 (17.42)	80 (8.69)
山林業	1 (0.16)	2 (0.65)	3 (0.33)
自営商工業（家族ぐるみ）	105 (17.18)	35 (11.29)	140 (15.20)
自営商工業（従業員雇用による）	82 (13.42)	7 (2.26)	89 (9.66)
会社員・公務員（一般事務または技術者）	170 (27.82)	37 (11.94)	207 (22.48)
会社員・公務員（管理職）	45 (7.36)	16 (5.16)	61 (6.62)
学校教職員	15 (2.45)	3 (0.97)	18 (1.95)
店員・工員・肉体労働者等	95 (15.55)	86 (27.74)	181 (19.65)
自由業	17 (2.78)	6 (1.93)	23 (2.50)
その他の職業	33 (5.40)	37 (11.94)	70 (7.60)
不明・その他	13 (2.13)	3 (0.97)	16 (1.74)
N.A.	9 (1.47)	24 (7.74)	33 (3.58)
計	611 (99.98)	310 (100.01)	921 (100.00)

第6表　きようだい構成（高校生）（%）

		男	女	計
きようだいなし（独り子）		26 (6.86)	22 (9.52)	48 (7.87)
きようだいあり		351 (92.61)	208 (90.04)	559 (91.64)
内訳（きようだい順位） 長男又は長女	同性の年下のきようだいをもつ者	〔99〕 (26.12)	〔69〕 (29.87)	〔168〕 (27.54)
	異性の年上又は年下のきようだいのみをもつ者	〔109〕 (28.76)	〔62〕 (26.84)	〔171〕 (28.03)
	二男または二女	〔83〕 (21.90)	〔55〕 (23.81)	〔138〕 (22.62)
	三男または三女	〔37〕 (9.76)	〔14〕 (6.06)	〔51〕 (8.36)
	四男または四女	〔17〕 (4.49)	〔7〕 (3.03)	〔24〕 (3.93)
	五男または五女	〔2〕 (0.53)	0	〔2〕 (0.33)
	同性間きようだい順位不明者	〔4〕 (1.06)	〔1〕 (0.43)	〔5〕 (0.82)
不明・その他		1 (0.26)	1 (0.43)	2 (0.33)
N.A.		1 (0.26)	0	1 (0.16)
計		379 (99.99)	231 (99.99)	610 (100.00)

（性別不明1名を除く）

青少年の**居住形態**では，保護者と同居する者は七割，親元を離れている者は三割弱であり，後者の内訳においては，住込みまたは寮が，そのうちの六割強を占める（**第7表**）。**職種**（仕事内容）について眺めると，ホワイト・カラー的職種に従事する者は30%弱，ブルー・カラー的職種に就いている者は67%弱いる。特殊技能者の5名は，S紙芸における染色図案家である（**第8表**）。**就業年数**の方は**第9表**の示す通りであるが，2年未満（1.5年未満を含む）・3年未満をモードにして，両端のカテゴリーになるほどパーセンテイジは減少する。**転職回数**では，一度も変わっていない者が圧倒的に多く，四分の三を占める。2回・3回以上の者は1回の者のそれぞれ半数になる（**第10表**）。なお会社別集計によれば，就業年数および転職回数は，会社によって分布にかなりの違いが認められた。多数回転職者の多いある会社では，就業年数0.5年未満の者の比率が著しく高く，5年以上の勤続者は皆無であった。

以上のようなフェイス・シート的特性を念頭におきながら，次に各生活機能局面における青少年の価値・態度体系を検討しよう。

第7表　居住形態（勤労青少年）

		実数	%
保護者と同居		217	70.00
保護者と別居		89	28.71
内訳	住込みまたは寮	〔56〕	〔62.92〕 N=89
	アパートまたは下宿	〔23〕	〔25.84〕
	きようだいまたは親類と同居	〔3〕	〔3.37〕
	その他・不明	〔1〕	〔1.12〕
	N.A.	〔6〕	〔6.74〕
不明・その他		3	0.97
N.A.		1	0.32
計		310	100.00

第8表　職種（仕事内容）（勤労青少年）

職種	実数	%
一般事務および技術関係の仕事	92	29.68
労力を要する仕事（工員等）	206	66.45
特殊技能を要する仕事	5	1.61
不明・その他	2	0.65
N.A.	5	1.61
計	310	100.00

第9表　就業年数(勤労青少年)

年数	実数	%
0.5 年未満	33	10.65
1 年未満	54	17.42
1.5 年未満	13	4.19
2 年未満	45	14.52
3 年未満	58	18.71
5 年未満	52	16.77
8 年未満	42	13.55
8 年以上	4	1.29
不明・その他	1	0.32
N.A.	8	2.58
計	310	100.00

第10表　転職回数(勤労青少年)

回数	実数	%
0 回	233	75.16
1 回	39	12.58
2 回	18	5.81
3 回以上	19	6.13
不明・その他	0	0
N.A.	1	0.32
計	310	100.00

4　各生活機能局面における態度と価値

A.　人的環境への適応

ここで人的環境というのは，青少年の持つ諸人間関係の中でも，その生活組織化過程に対して大きな影響力を与えていると思われる，仲間集団（peer group）の成員，保護者としての両親や兄姉，行為監督者としての教師（高校生の場合）や上役（勤労青少年の場合），との関係を指している。そうした人びとに対して，青少年はどのような適応を試みるものなのか。

先ず**友人関係**についてみると（**第11表**），何でも話し合えるような親友を一人も持たない者は，両グループとも約二割であり，全体の四分の三程度は，それぞれ幾人かの親友を持っている。その内訳で，「2名」は勤労青少年の方が多く，反対に「3名以上」は高校生の方が多い。これは，高校生の方が，学習や課外活動を通じて仲間集団を作りやすい環境にいるからであろう。友人関係における適応に関しては，まずまず健全であるといえる。

次に**社会的地位の上位者との人間関係**については，「自分の行いや態度についての，だ

第11表　親友の有無と人数（%）

		高校生	勤労青少年	計
親友なし		124 (20.29)	61 (19.68)	185 (20.09)
親友あり		459 (75.12)	239 (77.10)	698 (75.79)
内訳	1 名	〔121〕 (26.36)	〔64〕 (26.78)	〔185〕 (26.50)
	2 名	〔160〕 (34.86)	〔91〕 (38.08)	〔251〕 (35.96)
	3 名以上	〔172〕 (37.47)	〔79〕 (33.05)	〔251〕 (35.96)
	不明・その他	〔2〕 (0.44)	0	〔2〕 (0.29)
	N.A.	〔4〕 (0.87)	〔5〕 (2.09)	〔9〕 (1.29)
	(内訳パーセントにおける総数)	N＝459	N＝239	N＝698
不明・その他		3 (0.49)	1 (0.32)	4 (0.43)
N.A.		25 (4.09)	9 (2.90)	34 (3.69)
計		611 (99.99)	310 (100.00)	921 (100.00)

れの注意なら，すなおにうけ入れられますか」（二項目選択）という質問によって，上位者の統制的権威に対する態度を調べてみた。結果は**第12表**（高校生），**第13表**（勤労青少年）の通りである。前者の表では，「同級生や友達」が最も大きい発生化の40％強を示し，以下「母親」「父親」「先生」「兄・姉」の順になっている。後者の表では，「母親」が40％強で最も大きく，以下順次に「父親」「同僚や友達」「上役・先輩」「兄・姉」と並ぶ。高校生では，親・教師との縦の人間関係よりも，友人との横の人間関係に志向の比重がかかり，したがって家的・教師的統制は相対的に弱くなっている。中でも教師の権威性が小さい（24％弱）ことは，注目に値する。それは，戦後一般に，ものわかりがよくてあたかも生徒の友達のようにふるまえる先生であることが，望ましい教師の姿だと考えられていたことと，決して無関係ではなかろう。勤労青少年では，親的権威は一応保たれ，同僚・友人への志向に優るが，雇い主や上司・先輩の統制はさらにそれよりも劣る。性別でみれば，高校生では，女生徒が，友達や母親に対し非常に素直である。男子の勤労青少年は，同じ職場の人の統制に服する率が女子よりも高い。なお，勤労青少年を年令別に眺めると，高校生と同じ16・17才台で，親の注意を素直に受け入れる者は，他年令層よりも多く，六割弱の発生化を示し，一方「同僚・友

第12表　受容注意者(高校生)（発生比％）

注意者	男	女	性別不明	計
父親	128 (33.77)	67 (29.00)	0	196 (32.08)
母親	114 (30.08)	109 (47.19)	0	223 (36.50)
兄や姉	50 (13.19)	34 (14.72)	1 (100.00)	85 (13.91)
先生	105 (27.70)	37 (16.02)	0	142 (23.24)
上級生や先輩	22 (5.80)	9 (3.90)	0	31 (5.07)
同級生や友達	129 (34.04)	119 (51.52)	0	248 (40.59)
その他(異性の友人・親族等)	55 (14.51)	14 (6.06)	0	69 (11.29)
不明・その他	16 (4.22)	4 (1.73)	0	20 (3.27)
N.A.	14 (3.69)	8 (3.46)	0	22 (3.60)
集計者数	N＝379	N＝231	N＝1	N＝611

第13表　受容注意者（勤労青少年）（発生比％）

注意者	男	女	性別不明	計
父親	65 (33.51)	26 (25.74)	7 (46.67)	98 (31.61)
母親	74 (38.14)	45 (44.55)	8 (53.33)	127 (40.97)
兄や姉	31 (15.98)	16 (15.84)	0	47 (15.16)
雇い主	4 (2.06)	1 (0.99)	0	5 (1.61)
上役・先輩	52 (26.80)	19 (18.81)	5 (33.33)	76 (24.52)
同僚や友達	58 (29.90)	27 (26.73)	3 (20.00)	88 (28.38)
学校の時の先生	12 (6.19)	3 (2.97)	1 (6.67)	16 (5.16)
同郷の人	1 (0.52)	2 (1.98)	0	3 (0.97)
その他(異性の友人・親族等)	11 (5.67)	7 (6.93)	1 (6.67)	19 (6.13)
不明・その他	10 (5.15)	5 (4.95)	0	15 (4.84)
N.A.	8 (4.12)	4 (3.96)	0	12 (3.87)
集計者数	N＝194	N＝101	N＝15	N＝310

達」は少なくて一割にも足りない。これは，職場における仲間集団が未だその年令層ではそれほど発達しないことを示唆する。ただし年令別とのクロス集計分割表において，分布の一様性に関して有意差は認められなかった。

親的権威に対する態度をより深く知るため，「もし親があなたの意見になにか理くつをつけて賛成しないとき，たいていあなたはどうしていますか」という質問を発してみた。状況を二分し，(A)親の意見が間違っていない（と思う）場合と，(B)間違っている（と思う）場合とについて，それぞれ判断を求めた。前者(A)の場合，(イ)の「経験の深い親のいうことは，もっともな点もあるので，できるだけ親の意見に従うようにしている」という，親への信頼的態度をとる者は，(ロ)の「親のいうことに間違いはなくても，自分の意見をどこまでも主張して親を説きふせる」という自己主張者と較べて，高校生では約三倍，勤労青少年では約二倍になっている（**第14表**）。性別に関しては，高校生では差はないが，勤労青少年では，(イ)は女の方が多く，(ロ)は男の方に多い。つまり女性の方が親の意見を肯定しやすいといえよう（5％レベルで有意差あり）。後者(B)の場合に関しては，(イ)の「親の意見がかりに間違っていても，親のいうことだから仕方なく聞く」とする親の権威の盲従者よりも，(ロ)の「親の意見が間違っていると思うときは，その意見は聞かないで，自分の思ったようにする」という自立的態度の尊重者の方が，当然のことながら高校生・勤労青少年ともに，圧倒的に多い。だが少数とはいえ，7％ほどの盲従者がいることは，問題であろう。性別では，女子高校生の方が男子高校生よりも自立性が高い（2％レベルで有意

第14表　親に対する態度（％）

態度		高校生 男	高校生 女	高校生 性別不明	高校生 小計	勤労青少年 男	勤労青少年 女	勤労青少年 性別不明	勤労青少年 小計	計
(A)親の意見が間違っていない場合	(イ)できるだけ親の意見に従う	257 (67.81)	160 (69.26)	1 (100.00)	418 (68.41)	111 (57.22)	71 (70.30)	9 (60.00)	191 (61.61)	609 (66.12)
	(ロ)どこまでも自分の意見を主張する	90 (23.75)	55 (23.81)	0	145 (23.73)	60 (30.93)	21 (20.79)	6 (40.00)	87 (28.06)	232 (25.19)
	不明・その他	10 (2.64)	1 (0.43)	0	11 (1.80)	3 (1.55)	0	0	3 (0.97)	14 (1.52)
	N.A.	22 (5.80)	15 (6.49)	0	37 (6.06)	20 (10.31)	9 (8.91)	0	29 (9.35)	66 (7.17)
	計	379 (100.00)	231 (99.99)	1 (100.00)	611 (100.00)	194 (100.01)	101 (100.00)	15 (100.00)	310 (99.99)	921 (100.00)
(B)親の意見が間違っている場合	(イ)親のいうことに仕方なく従う	32 (8.44)	7 (3.03)	1 (100.00)	40 (5.67)	11 (5.67)	10 (9.90)	3 (20.00)	24 (7.74)	64 (6.95)
	(ロ)自分の思ったとおりにする	331 (87.34)	206 (89.18)	0	537 (87.89)	156 (80.41)	79 (78.22)	11 (73.33)	246 (79.35)	783 (85.02)
	不明・その他	4 (1.06)	6 (2.60)	0	10 (1.64)	3 (1.55)	0	0	3 (0.97)	13 (1.41)
	N.A.	12 (3.17)	12 (5.19)	0	24 (3.93)	24 (12.37)	12 (11.88)	1 (6.67)	37 (11.94)	61 (6.62)
	計	379 (100.01)	231 (100.00)	1 (100.00)	611 (100.01)	194 (100.00)	101 (100.00)	15 (100.00)	310 (100.00)	921 (100.00)

差あり)。勤労青少年については性差はない。こうした考察から，現代青少年は，親の体験的権威を認めはするが，もしその意見が間違っていると考えられるときは，自立的に行動する傾向がある，といえそうである。なお，「親に対する態度」と「保護者構成」とのクロス集計においては，両グループとも分布に大きな差は見られない。また勤労青少年に関して，「年令」とのクロス集計でも，分布に有意差は認められなかった。

以上のことから，現代青少年の人的環境への適応について，次のように結論づけられよう。(1)親の権威は一応認め，その統制に服しはするが，間違った権威のふりかざしに対しては，それを拒否して自立的に行動しようとする。(2)教師や雇い主・上司らの権威性は親的権威よりも弱い。(3)ことに高校生では，縦的人間関係よりも，仲間集団へ向う横的人間関係の方が，優位を占める。しかしながら全般的にみれば，彼ら青少年の生活組織化の適応機能局面においては，それほどの問題性は見当たらないようである。

B. 生活目標の達成

個人の生活の組織化は，たんに環境に適応するだけでなく，さらに進んで自己の生活目標を設定し，それに向って努力するという，遂行過程を含む。このような目標達成の機能局面が，現代青少年においては，どのように展開されているであろうか。

まずこの調査では，高校生と勤労青少年の双方に対し，生活目標の設定を中心とする**生活設計の組織度**を知るための質問を行なった。**第15表**は，「今から五年ほど後，あなたはどんなことをし，どんな生活をしていたいと思いますか。自由に書いて下さい。」という設問に対する答を，生活設計の組織程度に関してまとめたものである。各サンプルの組織度の高低は，記述された内容を一定の基準[27]に従って判定した。

この表で第一に気付かれるのは，生活設計の組織度が全般的に低いということである。半数の人たちは，その組織度が（低）レベルに属する。また不明その他，N. A. を合わせると30%に達する。一般に自由回答の質問における N.A. は多いのが普通であるが，おそらくこの人たちの中に

---

27) 判定基準は次のようなものである。

組織度(高)……職業名(会社名)・仕事内容等の記述があり，具体的な生活設計がなされていること。大学・学部・専攻等が指定されていること(高校生)。

組織度(中)……職種(例えば，サラリーマン・教師・経営者，等)，大学での専攻系列（文科系・理科系等)，等の指定があること。あるいは，生活内容，一般的生活態度，趣味に関して，かなり具体的で詳しい，しかもまとまった記述があること(例えば，「好きな人と結婚して，貧しくとも楽しい家庭生活を営みたい。読書，手芸，デッサンなどをする」)。

組織度(低)……社会的地位についての簡単な指摘だけがあること(例えば，「大学生」「平凡な家庭の主婦」など)。生活態度・職務が抽象的断片的にのみ述べられていること（例えば，「今の職場で真面目に働いていたい」「花嫁修業中」「自分を偽らぬ生活をしていたい」「会社でバリバリ働いている」など)。

組織度(極低)……容易には実現しないと思われる「夢」的希望の記述があること(例えば，「外国へ行ってのんびり暮す」「外国で働く」「世界旅行をしたい」など)。あるいは，未来に対する懐疑やあきらめの態度の記述のあること(例えば，「先のことなど何も判らない」「今のままでさえあればよい」など)。

第15表　生活設計の組織度（%）

組織度	高校生	勤労青少年	計
高	4 (0.65)	0	4 (0.43)
中	98 (16.04)	22 (7.10)	120 (13.03)
低	324 (53.03)	143 (46.13)	467 (50.71)
極低	29 (4.75)	19 (6.13)	48 (5.21)
不明・その他	36 (3.89)	13 (4.19)	49 (5.32)
N.A.	120 (19.64)	113 (36.45)	233 (25.30)
計	611 (100.00)	310 (100.00)	921 (100.00)

は，記述回答すること自体の億劫さよりも，明確性に欠ける自己の生活設計のゆえに，無回答にしたのがかなりいるのではないかと思われる。したがって実際の組織度は全体ではもっと低いかもしれない。（高）レベルにいたっては，僅か0.4%にすぎない。これらは，最近における急速な大衆社会化の動きに伴って，自己の社会的存在意義を見失った現代青少年が，個性的な未来の自我像を描きえないことの一つの表われだといえないだろうか。高校生と勤労青少年とでは，前者の方が全般にやや組織度が高い。（極低）レベルに関しては，高校生に五年後というと無理かと思われる「夢想」的生活の記述が多く，他方勤労青少年に，「今のままの生活」「未来のことなど判らない」という回答が多かったことは，実際の社会生活の体験の深浅を反映していて興味深い。

記述内容に関しては，高校生では，社会人としての生活ないしは生活態度を述べた者が最も多く，大学生活ないしは大学生としての生活態度を記した者が次いで多かった。女生徒では，花嫁修業，家庭生活について書いた者が多い。その他，生活態度一般を抽象的にのみ述べた場合も少なくなかった。これらの生活態度の中では，生活享受主義あるいは大衆的な家庭安住主義を理想とするようなケースも，比較的多く見受けられた。例えば，「五年後といえば僕は丁度大学を卒業したころになるので，望みは小さいが平凡なサラリーマンでいたいと思う」(17才男子)，「お金をため土地を百坪ぐらい買い，小さな家を建て，庭を少しとり花など植え，そして自分の好きな人を嫁にもらい，幸わせな家庭であまり欲を持たずのんきに生活したい」(18才男子)，「新しい家に住み，事務員で，日曜日には趣味をもち，平凡に親きようだい四人で暮す」(16才女子)，「ただ平凡でもいいから幸福な家庭を持ちたい」（17才女子）など。仕事へのとりくみ方にも，こうした傾向は顔を出す。例えば，「その頃は大学の四年か社会に出ていると思う。僕の希望である報道関係の仕事に従事し，若さを楽しみたい。」(傍点筆者)　全般に主体的・建設的・献身的な生活態度が少なく，総じて適応安住主義に陥っている傾向が強いように思われる。[28]

勤労青少年の記述内容は，職業的ないしは一般的な生活態度と達成目標（希望）に関するもの

28）桑畑勇吉の調査によれば，大阪市内の非行多発地域の高校生・勤労青少年の生活目標の中で，「正しい生活」・「社会の役に立つ生活」を選んだ者は，両グループそれぞれ44.8%，45%であり，「趣味生活」・「のんきな生活」を選んだ者は，それぞれ31.7%，33.6%，「考えていない」・「分らないので悩む」・「希望なし」が合わせて，各17.9%，16.5%となっている。この資料からも，適応主義や目標未確立の占めるパーセンテイジのかなり多いことが知られる。（桑畑勇吉，「非行多発地域の青少年の生活意識に関する調査」，大阪府青少年問題協議会編，「青少年非行に関する研究報告書（昭和34年度）」，昭36，97-98頁。）

が殆んどであるが，そこでもまた，大衆化された社会における安住性が求められている。貧しくとも楽しい平凡な生活（28%，N＝165），明るく精神的に充ちたりた生活（18%），物質的に豊かな生活（9%），などが望まれている。しかし職業については，自分自身の店を持ちたいとする願望が，特にKY機械などには強かった（13%）。事例的にみれば，「結婚しても食べていけるだけの給料をもらっているなら，平凡なサラリーマンでよいと思う」（19才男子工員），「明るい家庭を作りお金をためて行きたいと思う。自分たちの家があればいい」（20才女子工員），「平凡な家庭の主婦になっていたい」（21才女子工員），「どこかの平凡な主婦でありたいと思う。家庭のことが出来て健全であれば良いと思う」（20才女子工員）などの如く，家庭安住の希望が多い。殊に女子において，この傾向は著しい。しかしながらもちろん全部がそうだというのではなく，中には「未だ独身であるが，金銭的及び精神的にも余裕のある生活をしたい。またそれまでに不動産取引主任者の免許をとりたい」（21才事務員，月収20,000円）といった建設的な目標設定を行なっている者もいる。

生活目標を訊ねた後で，「そのためには，さしあたってどうしようと思っていますか」，また，（もしもそれが必ずしもうまく行かないのではないかと思う人には），「どのようなことが，さまたげになると思いますか」，という問によって，目標達成のためのさしあたっての計画とその阻害条件を知ろうとした。**当初計画**については，高校生では，当然のことながら，「受験勉強をする」（29%），「大学等へ入学する」（23%）などが発生化において大きく，勤労青少年の「貯金をする」（18%）「読書・勉強によって教養を増す」（10%）などとは対照的である。進学と貯金・教養増進がそれぞれの有力な達成手段だと考えられていることは頷けるのであるが，要はそれらがどの程度に有効な手段なのか，この点が彼らの生活組織化に対して大きく影響するであろう。

阻害条件については，N.A. が高校生で38%，勤労青少年で58%と多く，必ずしも明白ではないが，主体的条件として，自己の能力（学力）・意志力・努力の不足，また客体的条件として，家庭の問題，入試・教育制度（高校生），物価高・低賃金，仕事の問題（勤労青少年）などが，それぞれ3～10%ほどの発生比を示している。

この阻害条件と連関して，「あなたの生活で今いちばん心配なこと，悩みごとは何ですか」という，当人にとっての問題的な関心事

第16表　高校生の心配事・悩み事

	実数	発生比 %
1. 自己の性格・能力・健康・生き方，等について	66	10.80
2. 勉強・大学受験などについて	162	26.51
3. 自分の今後の進路についてまた未来に対する不安	101	16.53
4. 友人や異性のこと	68	11.13
5. クラブ・クラスなど学校生活について	17	2.78
6. 経済的な問題	10	1.64
7. 家族内の人間関係やその他，家の問題	38	6.22
8. 生活環境について	8	1.31
9. その他の諸問題	18	2.95
不明・その他	67	10.97
N.A.	200	32.73
集計者数	N＝611	100.00

を問うた。**第16表**は高校生，**第17表**は勤労青少年の**心配事・悩み事**をまとめたものである。両表とも N.A. が非常に大きかったのは，自由回答様式の質問だったためである。高校生では，大学受験やそのための勉強が苦悩の種となっており，また未来や進路についての心配・不安も大きい。1. の自己の性格・能力等に関しては，青少年期に特有の自己懐疑が強く働いているものと思われる。4. における友人との人間関係について悩む者は，その中の六割強の43名にも及ぶ。「その他の諸問題」の中には，ノイローゼ的な悩みの訴えが多い。一方，勤労青少年においては，5. の経済的問題，6. 家庭での問題，1. の自己の性格・能力等についての悩み，などが目立っている。5. では安給料，生活苦を訴え，6. では，家族間の不和の悩み，両親の健康についての心配が多く，また1. では自分の健康と生き方についての憂慮が強い。「その他」の中には，低学歴や結婚の問題もあるが，住居の問題について述べているケースが比較的多かった。2. の仕事についての悩みは意外と少なかった。こうした心配事・悩み事が，各人の生活組織化を阻害する萠芽となる場合も，少なくないであろう。

第17表　勤労青少年の心配事・悩み事

	実　数	発生比 %
1. 自己の性格・能力・健康・生き方，等について	25	8.06
2. 仕事のことについて	13	4.19
3. 自分の将来の生活について，また未来に対する不安	17	5.48
4. 友人や異性のこと	13	4.19
5. 経済的な問題	36	11.61
6. 家族間の人間関係やその他，家の問題	26	8.39
7. その他の諸問題	31	10.00
不明・その他	35	11.29
N.A.	151	48.71
集　計　者　数	N＝310	100.00

第18表　高校生の卒業後の進路

進　路	実　数	%
就　職	109	17.84
家業・家事の手伝	7	1.15
進　学	466	76.27
その他のコース	17	2.78
不明・その他	6	0.98
N.A.	6	0.98
計	611	100.00

ところで前述のように，高校生において切実な悩みとなっている大学入試・受験勉強の問題は，日本社会における学歴尊重主義に由来するものであり，またその当然の帰結なのである。彼らはこの学歴の問題をいかに受けとめ，どう対処しようと考えているのか。また諸般の事情から上級学校進学を断念せざるをえなかったものと思われる勤労青少年が，その問題をどう眺めているのだろうか。学歴の問題は，日本の現代青少年の現実の生活組織化に直接にかかわりあっており，その解明が必然的に要請されることになる。そこで先ず高校生には，二年生の学年末という時点において，卒業後の進路をどう決めているかを問うとともに，勤労青少年には，その就職の動機を尋ねた。**卒業後の進路**についての**第18表**においては，普通科生徒ということもあって，進学者が圧倒的に多く，就職者の約四倍になっている。その他の進路では，各種学校・就職と同時に大学夜間部進学，おけいこごと，等がある。

第19表に示された**就職動機**に関しては，4.の「家の事情から仕方なく」と，2.の「進学するより実社会で自分の力をのばしたいから」とが，ほぼ同じ割合で一番多く，3.の「進学する能力がないと思ったから」，6.の「早く自分の自由に使える金がほしかったから」がそれに次いでいる。これらの諸動機は，(a)2・5のような積極的・建設的なタイプと，(b)1・3・4・9のような消極的・不本意的なタイプと，(c)その他6・7・8・10から成る欲求充足的・偶然的等のタイプとに分けられるであろう。このうち(a)は生活組織化に対してプラス要因として機能すると考えられるが，(b)はそれに対し逆機能的要因となることが予想される。そこで，生活の非組織化傾向の一つのメルクマールとも考えられる**転職回数**とのクロス集計に基づいて，χ^2検定を行なってみたが，分布に有意な差は認められなかった（**第20表**）。これは，実際の日本社会における転職（特に中小企業における）は，客観的事情（例えば，勤め先の会社の倒産・経営不振）に由る場合がかなり多く，したがって必ずしも本人の個人的要因にのみよるとは限らないからであろう。また年令とのクロスにおいて，(a)の動機が高年令層ほど多く，(b)は低学年令層に多いという傾向が見られたが，検定の結果では有意差はなかった。さらに性別に関しても分布はほぼ一様で有意差は認められない。**就業年数**との分割表（**第21表**）では，年令の場合とは反対に，

第19表　勤労青少年の就職動機（%）

	男	女	性別不明	計
1.勉強を続けるのがもう嫌だから	13 (6.70)	3 (2.97)	1 (6.67)	17 (5.48)
2.進学するより実社会で自分の力をのばしたいから	55 (28.35)	24 (23.76)	3 (20.00)	82 (26.45)
3.進学する能力がないと思ったから	22 (11.34)	13 (12.87)	1 (6.67)	36 (11.61)
4.家の事情から仕方なく	53 (27.32)	30 (29.70)	3 (20.00)	86 (27.74)
5.早く社会の役に立ちたいと思ったから	6 (3.09)	4 (3.96)	1 (6.67)	11 (3.55)
6.早く自分の自由に使える金がほしかったから	14 (7.22)	13 (12.87)	2 (13.33)	29 (9.35)
7.たまたまよい就職口が見つかったから	4 (2.06)	3 (2.97)	1 (6.67)	8 (2.58)
8.都会での生活にあこがれて	3 (1.55)	1 (0.99)	0	4 (1.29)
9.入学試験に失敗したから	6 (3.09)	2 (1.98)	0	8 (2.58)
10.その他の動機(理由)	8 (4.12)	4 (3.96)	2 (13.33)	14 (4.52)
不明・その他	7 (3.61)	2 (1.98)	0	9 (2.90)
N.A.	3 (1.55)	2 (1.98)	1 (6.67)	6 (1.93)
計	194 (100.00)	101 (100.00)	15 (100.00)	310 (100.00)

第20表　就職動機と転職回数とのクロス集計分割表(%)

就職動機＼転職回数	0回	1・2回	3回以上	計
(a)積極的・建設的 (2・5)	74 (33.79)	13 (23.21)	6 (31.58)	93 (31.63)
(b)消極的・不本意的 (1・3・4・9)	110 (50.23)	27 (48.21)	10 (52.63)	147 (50.00)
(c)欲求充足的・偶然的等 (6・7・8・10)	35 (15.98)	16 (28.57)	3 (15.79)	54 (18.37)
計	219 (100.00)	56 (99.99)	19 (100.00)	294 (100.00)

d.f.=4　Pr ($\chi^2 \geqq 3.822$)=0.30～0.50

第21表　就職動機と就業年数とのクロス集計分割表（%）

就職動機＼就業年数	1年未満	2年未満	3年未満	5年未満	5年以上	計
(a) 積極的・建設的 (2・5)	34 (40.96)	15 (27.78)	14 (25.45)	11 (22.45)	18 (40.00)	92 (32.17)
(b) 消極的・不本意的 (1・3・4・9)	33 (39.76)	28 (51.85)	29 (52.73)	29 (59.18)	24 (53.33)	143 (50.00)
(c) 欲求充足的・偶然的等 (6・7・8・10)	16 (19.28)	11 (20.37)	12 (21.82)	9 (18.37)	3 (6.67)	51 (17.83)
計	83 (100.00)	54 (100.00)	55 (100.00)	49 (100.00)	45 (100.00)	286 (100.00)

d. f.＝8　$Pr(\chi^2 \geqq 9.724) = 0.20 \sim 0.30$

(a)が就業年数の小さい方と5年以上とに多く，(b)が大きい方に多いという傾向が見られたが，x^2検定の結果としては，やはり有意差があるとはいえない。以上の検討から，勤労青少年の就職動機は，年令・性別・転職回数・就業年数にかかわらず，(a)の積極的・建設的なタイプが全体の約三分の一存在し，また(b)の消極的・不本意的なタイプが丁度半分を占め，残りの二割弱は(c)の欲求充足的・偶然的等のタイプである，と結論される。(b)タイプの者が半数にも達するということは，生活組織化に対する影響を考えるとき，特に注意を要する。

さて，当該サンプルの高校生の中でその四分の三が進学希望者だということは，日本社会における学歴の持つ大きい意味の直接的な投影だといえなくもない。また当該勤労青少年サンプルの半数が，何らかの意味で進学を断念することを余儀なくされたことに，その就職への主たる動機づけを持っているという事実は，彼らにおける高学歴冀求の潜在を間接的に証明しているのではなかろうか。いずれの青少年にとっても，学歴の問題は，その生活目標の達成の成否の鍵を握るものとして，彼らの日常における重要なしかも最大の関心事とならざるをえない。

このような観点から，次に，**学歴**というものに対してどのような考えを持っているかが改めて問われた。**第22表**は，「社会的に成功するには高い学歴が必要だと思いますか。それともそんなものは必要ではないと思いますか」という質問に対する答えを表示したものである。2.の「場合によって必要なこともある」という考え方が最も多く，次いで4.の「実力さえあれば不必要」が，その約半分の二割強を示す。しかしここで注意すべきことは，高校生と勤労青少年とで明らかに分布に差があるということである（危険率0.001以

第22表　学　歴　観（%）

学歴観＼	高校生	勤労青少年	計
1.どうしても必要	113 (18.49)	41 (13.23)	154 (16.72)
2.場合によって必要なこともある	292 (47.80)	99 (31.94)	391 (42.45)
3.それほど必要ではない	73 (11.95)	61 (19.68)	134 (14.55)
4.実力さえあれば不必要	109 (17.84)	90 (29.03)	199 (21.61)
不明・その他	4 (0.65)	5 (1.61)	9 (0.98)
N.A.	20 (3.27)	14 (4.52)	34 (3.69)
計	611 (100.00)	310 (100.01)	921 (100.00)

d. f.＝3　$Pr(\chi^2 \geqq 32.486) < 0.001$

（不明，その他およびN.A.を除く分割表による）

下で有意)。すなわち，高校生の方が，高学歴の必要性を認める度合が高く，逆に勤労青少年は，その必要性を認めない傾向の方が強い。

1.の「どうしても必要」と考える人には，さらにその理由を自由に記入させたが，高校生では，113人中の52名（46.02%）が，「社会のしくみが学歴を要求するからだ」と答えて最も多く，他に「現代社会では実力よりも学歴の方が尊重される」，「高い学歴はそれだけの実力を伴う」，「学歴がなければ人に認められず劣等感を持つ」，「教養を身につけるために」，「社会的指導者になるために不可欠」，「人の社会的評価は実力・人格より学歴による」「昇進するのに必要」等の諸理由が，それぞれ3～5%あった。勤労青少年では，41人中の6名（14.63%）が，「現代社会では高学歴がなければ社会的に成功できないしくみになっているから」と答え，他に高校生のとほぼ等しい諸理由が，それぞれ10%内外あった。

2.の「場合によって必要なこともある」とする人には，それがどんな場合であるかを，同じように自由に記入させた。高校生では，「学歴を重視するような，官公庁・大企業などに就職する場合」と考える者が最も多く，292人中の62名(21.23%）を占め，「大学を出ることが必要な条件となる専門職に就いたり技術者になる場合」も60名（20.55%）に達する。その他「人物評価に際して」「指導者となる場合」「教養増進」などが数パーセントずつ存在した。このように高校生が主に良い就職をするに際して必要な場合があると考えるのに対して，勤労青少年は，より現実的な，身近な問題として考えている。すなわち，「人に認めてもらおうとする場合に必要」だとする人が，99人中の21名（21.21%)と一番多く，次いで「昇給・昇任に際して」（10名，10.10%)，「一流会社に入ってサラリーマンとして成功しようとする時」(7名，7.07%)，「専門職に就く場合」(6名，6.06%)，などとそれぞれ必要な場合を挙げている。

このような学歴観を，高校生については，先に述べた卒業後の進路と，また勤労青少年については，就職動機と，それぞれクロス集計して**第23表**，**第24表**のような分割表を得たが，いずれも分布の一様性に関して有意の差があるとはいえないという検定結果が出た。つまり高校生では，どの進路をとる者も，ほぼ一様に高学歴の必要性を感じており，ただ「家業・家事手伝」者において「それほど必要ではない」とする比率が特に高いだけである。また勤労青少年においては，その就職の動機がどうであっても，学歴は「場合によって必要なこともある」または「実力さえあれば不必要」と考える者が多い。ただ就職動機の(a)と(b)とでは，前者の学歴観の分布が割合い分散し

第23表　学歴観と卒業後の進路とのクロス集計分割表(高校生)(%)

学歴観＼進路	就職	家業・家事の手伝	進学	その他のコース	計
1.どうしても必要	15 (14.42)	1 (14.29)	92 (20.40)	5 (29.41)	113 (19.52)
2.場合によって必要なこともある	57 (54.81)	3 (42.86)	220 (48.78)	7 (41.18)	287 (49.57)
3.それほど必要ではない	13 (12.50)	3 (42.86)	54 (11.97)	2 (11.76)	72 (12.44)
4.実力さえあれば不必要	19 (18.27)	0	85 (18.85)	3 (17.65)	107 (18.48)
計	104 (100.00)	7 (100.01)	451 (100.00)	17 (100.00)	579 (100.01)

d.f.=9　$Pr(X^2 \geqq 9.724)=0.20 \sim 0.30$

ているのに対し，後者のそれは，2.と4.に分極的に集中する度合が大きい点が注目される。だがしかし勤労青少年の場合，実際の自己の学歴と学歴観との相関が問題となろう。そこで両者間のクロス集計表（**第25表**）に基づいて，x^2 検定を行なったところ，5％レベルで有意差が見られた。すなわち，大学卒クラスにおいては差はないが，高校卒クラスは，高学歴を必要視する者の方が多く（55.71％），逆に中学卒クラスは，その必要性をそれほど認めない者の方が多くなっている（55.55％）。

第24表　学歴観と就職動機とのクロス集計分割表（勤労青少年）（％）

学歴観＼就職動機	(a)積極的・建設的（2・5）	(b)消極的・不本意的（1・3・4・9）	(c)欲求充足的・偶然的等（6・7・8・10）	計
1.どうしても必要	20 (14.49)	8 (8.89)	12 (23.08)	40 (14.29)
2.場合によって必要なこともある	42 (30.43)	35 (38.89)	16 (30.77)	93 (33.21)
3.それほど必要ではない	32 (23.19)	15 (16.67)	11 (21.15)	58 (20.71)
4.実力さえあれば不必要	44 (31.88)	32 (35.56)	13 (25.00)	89 (31.79)
計	138 (99.99)	90 (100.01)	52 (100.00)	280 (100.00)

d.f.=6　Pr($\chi^2 \geqq 6.440$)=0.30～0.50

ところで青少年の生活目標の達成にとって，もう一つ見逃してはならないポイントがある。それは，彼らの同一化（identification）の対象となるところの理想自我（ego-ideal）が，どのような人物ないしは人間像に求められているか，という点である。青少年たちは，世代的な価値の連続性をむしろ断ち切るような形で，常に新しい自分たちの理想的人間を探し求め，それを追いかける。大衆化現象の顕著な現代社会にあっては，それはしばしば，ローウェンタール（L. Lowenthal）の名付けた消費的偶像（idols of consumption）――映画スター・歌手・プロスポーツ

第25表　学歴観と自己の学歴とのクロス集計〔分割〕表（勤労青少年）（％）

学歴観＼自己の学歴	中学卒		高校 在学・中退・卒		大学（含，短大）在学・卒		不明その他	N.A.	計	
1.どうしても必要	14 (10.37)	50 (37.04)	21 (15.00)	78 (55.71)	0	2 (50.00)	2 (33.33)	4 (16.00)	41 (13.23)	140 (45.17)
2.場合によって必要なこともある	36 (26.67)		57 (40.71)		2 (50.00)		1 (16.67)	3 (12.00)	99 (31.94)	
3.それほど必要ではない	28 (20.74)	75 (55.55)	30 (21.43)	58 (41.43)	0	2 (50.00)	0	3 (12.00)	61 (19.68)	151 (48.71)
4.実力さえあれば不必要	47 (34.81)		28 (20.00)		2 (50.00)		2 (33.33)	11 (44.00)	90 (29.03)	
不明・その他		4 (2.96)		1 (0.71)		0	0	0		5 (1.61)
N.A.		6 (4.44)		3 (2.14)		0	1 (16.67)	4 (16.00)		14 (4.52)
計		135 (99.99)		140 (99.99)		4 (100.00)	6 (100.00)	25 (100.00)		310 (100.01)

d.f.=2　Pr($\chi^2 \geqq 7.155$)=0.02～0.05

（不明・その他およびN.A.を除く3×2分割表による）

選手など――に集中する傾向が強い。[29] しかしこうしたアイドルに同一化の対象を求める限り，はたして建設的で着実な生活組織化がなされうるであろうか。「一夜明ければ有名人」という現代的奇蹟を夢みるばかりでは，堅牢な生活設計の図面は引かれえないであろう。われわれの調査対象となった青少年では，この点どうであろうか。

本調査では，「あなたはどのような人にあこがれますか。名前を具体的に三人あげて下さい」という質問によって，サンプル青少年のアイドルを聞いた。**第26表**は，具体的な人物名を捨象して類別化した集計結果である。全般的に眺めると，高校生・勤労青少年ともに N.A. が大きく，したがって類型として示された理想人物の発生化は，N. A. と不明その他を除いた人数を母数にして計算した。この表に関する限り，青少年の**憬れる人物**は，「政界・財界人」のカテゴリーに一番多く見られ，消費的偶像たる「選手・芸能人ら」のカテゴリーは，「文化人」「その他の有名人」とほぼ同じ30%強であって，その生活組織化が特に不健全だとは思われない。しかし勤労青少年では，消費的偶像の発生比が，高校生の約二倍になっている。そこにはもう，戦前・戦中の修身教科書に必ず登場した二宮金次郎の姿などは見当らない。実際に書かれた人名では，文化人として，朝永振一郎・野口英世・福沢諭吉・岡潔・杉田玄白・末川博・アインシュタイン・キューリー夫人・シュバイツァー・ラッセル・マルクス・レーニン・親鸞・池田大作・ルソー・ベートーベン・マチス等が，政治家としては，ケネディ（特に高校生に多い）・リンカーン・ガンジー・ネール・毛沢東・フルシチョフ・ライシャワー・ナポレオン・吉田茂・池田勇人・大野伴睦・三木武夫・河野一郎・佐々木更三・河上丈太郎，等がある。また財界人では，松下幸之助が非常に多く，他にロックフェラー，本田宗一郎，などが挙げられている。スポーツ選手では，長島，ヘーシング，大松博文，等が，また芸能人では，植木等・橋幸夫・吉永小百合・ビートルス・石原裕次郎・ショーンコネリー・坂本九・左幸子・天知茂・桂米朝，などの名が多く見られる。その他の有名人の中では，堀江謙一，ジェームス・ボンド，ヘレン・ケラー，信長，秀吉，家康，ジンギスカン，義経，孔子，ヒッチコック，などが多い。

以上の諸点の検討から，生活目標の達成に関する主要な特徴が，次のように指摘される。(1)生活設計の組織度は全般的に低く，記述された生活態度は，適応主義的な生活享受タイプが多い。(2)悩み事・心配事に関しては，高校生では，大学受験ということが最大のものであり，勤労青少年では，経済的・家庭的な諸問題を多くかかえている。(3)勤労青少年の就職動機は，年令，性別，転職回数，就業年数などにかかわらず，消極的・不本意的タイプの者の多さが目立っている。(4)学歴観については，高校生の方が高学歴の必要性を感じている。(5)同一化の対象となる憬れる人物像を眺めると，政界・財界人などが，いわゆる消費的偶像たる選手・芸能人よりも多

29) D. MacDonald, "A Theory of Mass Culture," *in* B. Rosenberg and White, D. *eds.*, Mass Culture, the Popular Arts in America, 1957, pp. 66-67.

第26表　憬れる人物の類型

		高校生		勤労青少年		計	
		実数	発生比 %	実数	発生比 %	実数	発生比 %
文化人	研究者・学者	55	15.71	7	6.14	62	13.36
	技術者	2	0.57	0	0	2	0.43
	芸術家・小説家	47	13.43	13	11.40	60	12.93
	宗教家	2	0.57	1	0.88	3	0.65
	知識人	7	2.00	0	0	7	1.51
	二つ以上に亘るもの	18	5.14	6	5.26	24	5.17
	〔小計〕	〔131〕	〔37.43〕	〔27〕	〔23.68〕	〔158〕	〔34.05〕
政界・財界人、等	政治家	128	36.57	27	23.68	155	33.41
	軍人	5	1.43	0	0	5	1.08
	財界人	19	5.43	10	8.77	29	6.25
	君主・皇族	7	2.00	1	0.88	8	1.72
	政治運動家	4	1.14	0	0	4	0.86
	二つ以上に亘るもの	7	2.00	5	4.39	12	2.59
	〔小計〕	〔170〕	〔48.57〕	〔43〕	〔37.72〕	〔213〕	〔45.91〕
身近な人、等	友人・知人	14	4.00	0	0	14	3.02
	父母	24	6.86	8	7.02	32	6.90
	先生・恩師	13	3.71	2	1.75	15	3.23
	逸話の持主	6	1.71	0	0	6	1.29
	親族・親戚	3	0.86	0	0	3	0.65
	上役・目上の人	0	0	7	6.14	7	1.51
	二つ以上に亘るもの	2	0.47	1	0.88	3	0.65
	〔小計〕	〔62〕	〔17.71〕	〔18〕	〔15.79〕	〔80〕	〔17.24〕
選手・芸能人、等	スポーツ選手登山家	6	1.71	6	5.26	12	2.59
	芸能人	66	18.86	43	37.72	109	23.49
	勝負師	8	2.29	0	0	8	1.72
	アナなどタレント	3	0.86	0	0	3	0.65
	その他	1	0.29	8	3.51	5	1.08
	二つ以上に亘るもの	5	1.43	4	7.02	13	2.80
	〔小計〕	〔89〕	〔25.43〕	〔61〕	〔53.51〕	〔150〕	〔32.31〕
その他の有名人	偉人・聖人・君子	54	15.43	4	3.51	58	12.50
	仮空の人物	16	4.57	2	1.75	18	3.88
	武士・殿様	17	4.86	8	7.02	25	5.39
	探検家・冒険家	5	1.43	1	0.88	6	1.29
	歴史上の重要人物	17	4.86	1	0.88	18	3.88
	ヒューマニスト	10	2.86	1	0.88	11	2.37
	一般有名人	0	0	3	2.63	3	0.65
	二つ以上に亘るもの	14	4.00	1	0.88	15	3.23
	〔小計〕	〔133〕	〔38.00〕	〔21〕	〔18.42〕	〔154〕	〔33.19〕
発生比母数（集計者数から不明その他・N.A.を除いた数）		N＝350	〔100.00〕 57.28	N＝114	〔100.00〕 36.77	N＝464	〔100.00〕 50.38
不明・その他		21	3.44	24	7.74	45	4.89
N.A.		240	39.28	172	55.48	412	44.73
集計者数		N＝611	100.00	N＝310	100.00	N＝921	100.00

第27表　規則遵守についての考え方（規則観）（%）

規則観	高校生 男	高校生 女	高校生 性別不明	高校生 小計	高校生 計	勤労青少年 男	勤労青少年 女	勤労青少年 性別不明	勤労青少年 小計	勤労青少年 計	計
①こういう規則を守らない人には，進んで注意するようにしている	16 (4.22)	8 (3.46)	0	24 (3.93)	266 (43.54)	14 (7.22)	4 (3.96)	3 (20.00)	21 (6.77)	157 (50.64)	45 (4.89)
②たとえ守らない人があっても，自分だけはいつも守るようにしている	149 (39.31)	93 (40.26)	0	242 (39.61)		72 (37.11)	61 (60.40)	3 (20.00)	136 (43.87)		378 (41.04)
③皆が守っている場合は自分も守るが，皆も破っているようなとき，自分だけ守るなどということはしない	49 (12.93)	41 (17.75)	0	90 (14.73)	286 (46.81)	21 (10.82)	17 (16.83)	3 (20.00)	41 (13.23)	125 (40.33)	131 (14.22)
④だれにも迷惑をかけないし，危険もないような場合なら，別にそれほど規則にとらわれなくてもよい	121 (31.93)	74 (32.03)	1 (100.00)	196 (32.08)		62 (31.96)	16 (15.84)	6 (40.00)	84 (27.10)		280 (30.40)
⑤規則を正直に守っているものが結局ばかをみる世の中だから，正直に守っていては世渡りはできないと思う	14 (3.69)	1 (0.43)	0		15 (2.45)	18 (9.28)	3 (2.97)	0		21 (6.77)	36 (3.91)
不明・その他	14 (3.69)	4 (1.73)	0		18 (2.95)	3 (1.55)	0	0		3 (0.97)	21 (2.28)
N.A.	16 (4.22)	10 (4.33)	0		26 (4.26)	4 (2.06)	0	0		4 (1.29)	30 (3.26)
計	379 (99.99)	231 (99.99)	1 (100.00)		611 (100.01)	194 (100.00)	101 (100.00)	15 (100.00)		310 (100.00)	921 (100.00)

〔高校生・勤労青少年間〕
d. f.＝2
Pr ($\chi^2 \geqq 12.510$)＝0.001～0.005
［不明・その他およびN.A.を除く，3（①＋②，③＋④，⑤）×2分割表による］

〔高校生・男女間〕
d. f.＝2
Pr($\chi^2 \geqq 5.094$)＝0.05～0.10
［不明・その他およびN.A.，性別不明を除く3（①＋②，③＋④，⑤）×2　分割表による］

〔勤労青少年・男女間〕
d. f.＝2
Pr($\chi^2 \geqq 9.504$)＝0.005～0.01
［不明・その他およびN.A.，性別不明を除く3（①＋②，③＋④，⑤）×2　分割表による］

く，後者の占める割合は比較的小さかった。かくて現代青少年の生活目標達成の機能局面は，生活設計の組織度，高校生の進学準備，勤労青少年の就業動機などにおいて，若干問題を残しているといえよう。これらの諸点は，彼らの生活組織化を阻害するきっかけとなる可能性を十分に持っており，それらには特に注意が払われねばならない。

C. 規範への同調と一般的生活態度

生活構造の組織化は，前述の適応と達成の局面についてのみ行なわれるのではなく，さらに社会規範への同調と生活態度の定型化という，いわば構造維持的機能局面に関しても遂行される。そこで本調査においては，この機能局面を二つの質問によって検討することにした。

第一の質問の目的は，公的状況における**規則遵守についての考え方**を聞くことによって，社会規範に対する青少年の同調性を調べることである。「駅での『二列に並んで順序よくお乗り下さい』，庭園や公園での『芝生内への立入り禁止』や『野球をしてはいけない』，などの規則に対する，あなたの考え方やふるまい方は，つぎのどれにいちばん近いですか」という質問に対する回答の頻度分布が，**第27表**に示された。規範観の諸選択肢の中で，①と②は積極的遵守者，③と④は状況的遵守者，⑤は遵守軽視者を，それぞれ表わしている。高校生，勤労青少年とも，②の「自分だけはいつも守る」が一番多くて約四割，次いで④の「それほど規則にとらわれなくてよい」が三割強となっているが，積極的遵守者は勤労青少年の方が少し多く，他方，状況的遵守者は高校生の方にやや多い。χ^2 検定では，危険率0.005で有意差があった。⑤の規則観は，勤労青少年の方にやや多く見られる。高校生だけについてみれば，③④は女子に，⑤は男子に多い。しかし性別分布における有意差は存しない。勤労青少年に関しては，②③が女子に多く，①④⑤は男子に多い。この両性間では，1％の有意水準で分布差が見られる。すなわち，高校生とは反対に，積極的遵守者は女子の方が多く，状況的遵守者と遵守軽視者は男子の方に多く集っている。このように，規則の遵守についての考え方では，女子勤労青少年を除けば，状況的遵守でよいとする者が比較的多いことに注目しなければならない。

勤労青少年の場合，この規則観を年令とクロスさせて検定したところ，危険率 0.005 で分布に有意差があった。年令が高いほど積極的遵守者が増え，また逆に遵守軽視者が減る傾向にある。状況的遵守者は18･19才で最も多い(**第28表**)。そこでこのような傾向が本当

第28表　規則観と年令とのクロス集計分割表(勤労青少年)(％)

規則観＼年令	17才以下	18～19才	20～22才	23～26才	計
積極的遵守①②	25 (47.17)	37 (45.68)	68 (55.74)	21 (72.41)	151 (52.98)
状況的遵守③④	22 (41.51)	37 (45.68)	47 (38.52)	8 (27.59)	114 (40.00)
遵守軽視⑤	6 (11.32)	7 (8.64)	7 (5.74)	0	20 (7.02)
計	53 (100.00)	81 (100.00)	122 (100.00)	29 (100.00)	285 (100.00)

d. f.＝6　Pr($\chi^2 \geqq 21.090$)＝0.001～0.005

に青少年の特徴となっているかどうかを確めるため，すでに行なった調査の成人男女の資料と比較してみた。**第29表**は，京都市内三地域の婦人会員とその夫における規則観の度数分布と，[30] 第27表における高校生・勤労青少年の合計値とを比較したものである。χ^2 検定の結果，危険率 0.001 以下で有意差があった。③④の状況的遵守と⑤の遵守軽視が青少年の方に多く，他方①②の積極的遵守は，成人男子および女子においてともにかなり多くなっていることが判る。したがって年令が低いほど遵守率は低下すると言いえよう。

第29表　規則観の青少年・成人別分布(%)

規則観	青少年	成人男子	成人女子	計
①守らない人には進んで注意する	45 (4.89)	7 (3.57)	13 (3.93)	65 (4.49)
②自分だけはいつも守る	378 (41.04)	114 (58.16)	206 (62.24)	698 (48.20)
③皆が破るとき自分だけ守るということはしない	131 (14.22)	16 (8.16)	27 (8.16)	174 (12.02)
④それほど規則にとらわれなくてよい	280 (30.40)	27 (13.78)	41 (12.39)	348 (24.03)
⑤正直に守っていては世渡りはできない	36 (3.91)	5 (2.55)	2 (0.60)	43 (2.97)
不明・その他	21 (2.28)	7 (3.57)	8 (2.42)	36 (2.49)
N.A.	30 (3.26)	20 (10.20)	34 (10.27)	84 (5.80)
計	921 (100.00)	196 (99.99)	331 (100.01)	1448 (100.00)

d.f.=8　$Pr(\chi^2 \geqq 75.696) \ll 0.001$

〔不明その他およびN.A.を除く 3(①+②，③+④，⑤)×2(青少年・成人)分割表による〕

また勤労青少年について，その規則観と転職回数とのクロス集計から χ^2 検定を行なったが，有意差はなかった。遵守軽視者は転職回数も多いのではないかと思ったが，両者は互に独立である。しかしまた高校生について，親の意見が間違っていると思う場合の態度との相関をとってみると，積極的遵守者は，親の意見に仕方なく従うとする者の方に多く，逆に状況的遵守者は，自分の思った通りにする者の方に多い。しかし遵守軽視者の比率が同じであるため，χ^2 検定においては有意差はなかった(**第30表**)。さて規則遵守の如き規範への同調が生活組織化の一つの要件だとすれば，以上の検討から，現代青少年のこの機能局面における生活組織化は，いくらか問題を含みながらも，まずまず健全だと言えよう。

第30表　規則観と間違った親の意見に対する態度とのクロス集計分割表(高校生)(%)

規則観＼親への態度	仕方なく親の意見に従う	自分の思ったようにする	計
積極的遵守 ①②	21 (56.76)	227 (45.49)	248 (46.27)
状況的遵守 ③④	15 (40.54)	259 (51.90)	274 (51.12)
遵守軽視 ⑤	1 (2.70)	13 (2.61)	14 (2.61)
計	37 (100.00)	499 (100.00)	536 (100.00)

d.f.=2　$Pr(\chi^2 \geqq 1.833) = 0.30 \sim 0.50$

第二の質問は，青少年の一般的生活態度がどのような特徴を持つかということに係わる。この質問では，五組のそれぞれ対になった一般的生活態度——これを略して **B.M.T.** (Basic Motiva-

30) 拙論「婦人の生活態度」，重松俊明編，「婦人の学習と生活態度——京都府下七地域における比較研究の概要——」，京都大学教育学部教育社会学研究室研究報告，第8号，昭和40，131頁。

tional Trends）と呼ぶ[31]——について，「あなたの生活のしかたや気分に近いのは，(イ)の方ですか，(ロ)の方ですか」と問い，(イ)(ロ)のいずれかに○をつけさせた。その結果を(a)〜(e)の各対について整理すると，次のようになる。

(a) (ロ)自律主義（autonomy）——(イ)他律主義（heteronomy）

(イ) 自分では正しいと思っても，世間から，とやかく言われるようなことはしない方がよい。

(ロ) 世間の口はうるさいものだが，そんなことを気にしていては，これと思うことは何もできない。

第31表は，(イ)の他律主義と(ロ)の自律主義の頻度を，高校生・勤労青少年別に示したものである。両グループ間では，自律主義は高校生に，他律主義は勤労青少年にやや多くなっているが，大差はない。各グループの男女間にはそれぞれ有意差があり，自律主義は男，他律主義は女の方に傾斜している。しかし全体的に眺めると，自律主義は約七割に達する。これを京都市内成人の場合（自律主義52.75%，他律主義35.76%）と比較すると，[32] 青少年における自律主義の相対的な優位は明らかである。なお勤労青少年について年令階層で分けると，17才以下で自律主義が83%に達するほかは，すべて70%前後であって，分布に大差はなかった。

第31表　BMT(a)自律主義——他律主義　(%)

	高校生				勤労青少年				計
	男	女	性別不明	小計	男	女	性別不明	小計	
(ロ)自律主義	287 (75.73)	156 (67.53)	1 (100.00)	444 (72.67)	143 (73.71)	59 (58.42)	10 (66.67)	212 (68.39)	656 (71.23)
(イ)他律主義	80 (21.11)	66 (28.57)	0	146 (23.90)	40 (20.62)	38 (37.62)	3 (20.00)	81 (26.13)	227 (24.65)
不明・その他	0	1 (0.43)	0	1 (0.16)	0	1 (0.99)	0	1 (0.32)	2 (0.22)
N.A.	12 (3.17)	8 (3.46)	0	20 (3.27)	11 (5.67)	3 (2.97)	2 (13.33)	16 (5.16)	36 (3.91)
計	379 (100.00)	231 (99.99)	1 (100.00)	611 (100.00)	194 (100.00)	101 (100.00)	15 (100.00)	310 (100.00)	921 (100.01)

〔高校生・男女間〕
d.f.=1　$Pr(\chi^2 \geqq 4.667)=0.02 \sim 0.05$

〔勤労青少年，男女間〕
d.f.=1　$Pr(\chi^2 \geqq 9.460)=0.001 \sim 0.005$

〔不明その他およびN.A.,性別不明を除く
2×2分割表による(以下各表同じ)〕

(b) (ロ)積極主義（positivism）——(イ)消極主義（negativism）

(イ) 「出る杭は打たれる」というたとえもあるように，何ごともひかえ目にするよう心がけている。

(ロ) 小さなことでも，よいと思ったことは，ひとの先に立つて，すぐ実行に移すよう心がけている。

第32表に示された(ロ)の積極主義と(イ)の消極主義に関する分布においては，高校生・勤労青少年間で，積極主義が高校生の方にごくわずか多いほか，差はない。性別に関してみると，高校生で

31) 各 B.M.T.について詳しくは，前掲拙論「婦人の生活態度」，93—104頁を参照されたい。

32) 以下の各 B.M.T.における成人の資料は，前掲拙論「婦人の生活態度」，105—110頁の第67表〜第72表より算出した。

第32表　BMT(b)積極主義——消極主義（%）

	高校生				勤労青少年				計
	男	女	性別不明	小計	男	女	性別不明	小計	
(ロ) 積極主義	207 (54.62)	123 (53.25)	0	330 (54.01)	108 (55.67)	44 (43.56)	12 (80.00)	164 (52.90)	494 (53.64)
(イ) 消極主義	142 (37.46)	79 (34.20)	0	221 (36.17)	66 (34.02)	46 (45.54)	2 (13.33)	114 (36.77)	335 (36.37)
不明・その他	12 (3.17)	3 (1.30)	1 (100.00)	16 (2.62)	3 (1.55)	0	0	3 (0.97)	19 (2.06)
N.A.	18 (4.74)	26 (11.26)	0	44 (7.20)	17 (8.76)	11 (10.89)	1 (6.67)	29 (9.35)	73 (7.93)
計	379 (99.99)	231 (100.01)	1 (100.00)	611 (100.00)	194 (100.00)	101 (99.99)	15 (100.00)	310 (99.99)	921 (100.00)

〔高校生・男女間〕
d. f.=1　Pr($\chi^2 \geqq 0.144$)=0.70〜0.80

〔勤労青少年・男女間〕
d. f.=1　Pr($\chi^2 \geqq 4.218$)=0.02〜0.05

は差が見当らないのに対して，勤労青少年では，男に積極主義者の方が，女に消極主義者の方が多く存在する。検定すると5%レベルで有意差があった。全体では，積極主義が約半分の53%，消極主義が三分の一強の36%を示している。これを前同様に，成人の場合（積極主義44.24%，消極主義41.52%）と較べると，やはり青少年の方が積極主義的であることが判る。勤労青少年における年令とのクロス集計では，年令階層別の分布には大差は見られなかった。

(c)　(ロ)欲望否定主義（asceticism）——(イ)欲望肯定主義（carnalism）

(イ)　人間の欲望というものも，自然に天からさずかったもので，お互いそれを認め合うことが大切だ。

(ロ)　人間にはみにくい欲望が強くそなわっているので，その誘惑にうち勝つようにするのが本当の人生だ。

この B.M.T. についての分布は，**第33表**に示された通りであるが，ここでも高校生・勤労青少

第33表　BMT(c)欲望否定主義——欲望肯定主義（%）

	高校生				勤労青少年				計
	男	女	性別不明	小計	男	女	性別不明	小計	
(ロ) 欲望否定主義	212 (55.94)	124 (53.68)	1 (100.00)	337 (55.16)	110 (56.70)	53 (52.48)	5 (33.33)	168 (54.19)	505 (54.83)
(イ) 欲望肯定主義	139 (36.68)	86 (37.23)	0	225 (36.82)	64 (32.99)	35 (34.65)	7 (46.67)	106 (34.19)	331 (35.94)
不明・その他	4 (1.06)	1 (0.43)	0	5 (0.82)	3 (1.55)	0	0	3 (0.97)	8 (0.87)
N.A.	24 (6.33)	20 (8.66)	0	44 (7.20)	17 (8.76)	13 (12.87)	3 (20.00)	33 (10.65)	77 (8.36)
計	379 (100.01)	231 (100.00)	1 (100.00)	611 (100.00)	194 (100.00)	101 (100.00)	15 (100.00)	310 (100.00)	921 (100.00)

〔高校生・男女間〕
d. f.=1　Pr($\chi^2 \geqq 0.099$)=0.70〜0.80

〔勤労青少年・男女間〕
d. f.=1　Pr($\chi^2 \geqq 0.222$)=0,50〜0,70

年間で差は見当らない。また両グループとも性別に関して分布は一様である。全体的にも部分的にも，欲望否定主義が優位を占めて約55%，欲望肯定主義は約35%である。成人における資料（欲望否定主義56.36%，欲望肯定主義23.94%）と比較するなら，青少年においていくらか欲望肯定的傾向が強まっていることが判る。なお勤労青少年における年令とのクロス集計では，18～22才の年令層に欲望肯定的傾向が強く，17才以下および23～26才ではそれよりも弱くなっている。

(d) (イ)確定主義（determinateness）——(ロ)融通主義（elasticity）

(イ) 何か用事でかなり遠くのお宅を訪ねる場合，前もって先方に，用件を知らせたり，都合のよい日時をたずねておいてから，伺うようにしている。

(ロ) 前もって連絡すると，訪ねる方でも，迎える方でも，たいそうなことになるので，たとえ無駄足を運ぶことになってもかまわないから，前ぶれなしに訪ねるようにしている。

第34表は，(イ)の確定主義と(ロ)の融通主義との分布を示している。前と同じく高校生・勤労青少年間では大差はない。各グループにおける性差をみると，ともに，確定主義は女の方に，融通主義は男の方に多いが，高校生においてのみ有意差があった（危険率0.001以下）。また成人資料（確定主義64.85%，融通主義24.85%）と比較すると，青少年のこの B.M.T. はより確定主義的だといえそうである。勤労青少年の年令別クロス集計では，17才以下と23～26才では確定主義的傾向が強く，18～22才では融通主義の比率が高くなっている。

第34表　BMT(d)確定主義——融通主義　(%)

	高校生				勤労青少年				計
	男	女	性別不明	小計	男	女	性別不明	小計	
(イ) 確定主義	254 (67.02)	195 (84.42)	0	449 (73.48)	136 (70.10)	80 (79.21)	10 (66.67)	226 (72.90)	675 (73.29)
(ロ) 融通主義	107 (28.23)	26 (11.26)	0	133 (21.77)	41 (21.13)	15 (14.85)	3 (20.00)	59 (19.03)	192 (20.85)
不明・その他	3 (0.79)	2 (0.87)	1 (100.00)	6 (0.98)	1 (0.52)	0	0	1 (0.32)	7 (0.76)
N.A.	15 (3.96)	8 (3.46)	0	23 (3.76)	16 (8.25)	6 (5.94)	2 (13.33)	24 (7.74)	47 (5.10)
計	379 (62.03)	231 (37.81)	1 (100.00)	611 (100.00)	194 (100.00)	101 (100.00)	15 (100.00)	310 (99.99)	921 (100.00)

〔高校生・男女間〕 d.f.=1　$Pr(X^2 \geqq 24.844) < 0.001$

〔勤労青少年・男女間〕 d.f.=1　$Pr(X^2 \geqq 2.056) = 0.10 \sim 0.20$

(e) (イ)普遍・論理主義——(ロ)個別・状況主義

(universalism-logicism)　(particularism-situationism)

(イ) はじめはうまく行かなくても，道理があればしまいには認められるのだから，どんな場合でも，正しいと思うことはどこまでも主張し，自分をごまかさず，信念をもって生きることが大切だと思う。

(ロ) 世の中はそんなに甘くはないから，目上の人をいつも立て，自分の置かれた立場をよくわきまえて，人に好かれるように，その場その場に応じて，うまくふるまうことが，大切だと思う。

第35表に示されたこの B.M.T. に関しては，(イ)の普遍・論理主義は高校生の方に傾き，勤労青

第35表　BMT(e)普遍・論理主義――個別・状況主義（%）

	高校生				勤労青少年				計
	男	女	性別不明	小計	男	女	性別不明	小計	
(イ) 普遍・論理主義	257 (67.81)	167 (72.29)	0	424 (69.39)	115 (59.28)	62 (61.39)	8 (53.33)	185 (59.68)	609 (66.12)
(ロ) 個別・状況主義	97 (25.59)	41 (17.75)	0	138 (22.59)	60 (30.93)	28 (27.72)	3 (20.00)	91 (29.35)	229 (24.86)
不明・その他	5 (1.32)	0	1 (100.00)	6 (0.98)	1 (0.52)	1 (0.99)	1 (6.67)	3 (0.97)	9 (0.98)
N.A.	20 (5.28)	23 (9.96)	0	43 (7.04)	18 (9.28)	10 (9.90)	3 (20.00)	31 (10.00)	74 (8.03)
計	379 (100.00)	231 (100.00)	1 (100.00)	611 (100.00)	194 (100.01)	101 (100.00)	15 (100.00)	310 (100.00)	921 (99.99)

〔高校生・男女間〕
d. f.=1　$Pr(\chi^2 \geqq 4.181)=0.02 \sim 0.05$

〔勤労青少年・男女間〕
d. f.=1　$Pr(\chi^2 \geqq 0.270)=0.50 \sim 0.70$

少年では，(ロ)の個別・状況主義の比率が，高校生のそれより高くなっている。これは，厳しい社会の実生活に直接触れている者と，まだ学校という温室の中にいる者との，体験の差に由来するものであろうか。性差については，高校生において(イ)は女子の方に，(ロ)は男子の方に多い。χ^2 検定をすると，5%レベルで有意差が認められる。勤労青少年においては性差はない。しかし全体としては，(イ)対(ロ)の比は，2.6対1であり，これを成人の場合（(イ)普遍・論理主義53.94%，(ロ)個別・状況主義38.85%，(イ)/(ロ)=1.3/1）と較べると，やはり青少年には，普遍・論理主義的傾向がかなり強く現われている。しかし勤労青少年の年令別クロス集計では，(イ)は年令層の上昇とともにパーセントを増し，逆に(ロ)は年令層の低下とともにパーセントを増す傾向がある（ただし有意差があるとはいえない）。これは，低年令層の勤労青少年ほど上役・目上の人よりの圧力を強く感じるからかもしれない。

上記の如き五対の B. M. T. についての検討を総括すれば，現代青少年においては，(a)自律主義＞他律主義，(b)積極主義＞消極主義，(c)欲望否定主義＞欲望肯定主義，(d)確定主義＞融通主義 (e)普遍・論理主義＞個別・状況主義，という生活態度のパターンが存在する。これを成人（男女）の資料と比較すると，(c)を除く各 B. M. T. に関しては，青少年の方が，このパターンを一層明白に持っていることが判る。(c)に関しては，どちらかというと，青少年の方が，欲望肯定的傾向を多く持っている。この点は，その生活組織化に対し逆機能的に働く一つの要因ともなりうる可能性を持つという意味で，注意しておく必要がある。

以上現代青少年の社会規範への同調と，一般的生活態度の様相についての考察を行なったが，この機能局面は，その生活組織化にとって，いわば核的ないしは骨格的な存在意義を持つものであることを最後に指摘しておきたい。

D. 欲求充足と経済観念

個人の生活構造の組織化が，上述のように，環境への適応，目標の達成，規範への同調，とい

う機能的諸要件を満たすことによって行なわれるとしても，さらにそれは潜在的次元において，彼の生活上の欲求をも同時に充足せしめるものでなくてはならない。かくて組織化の第四の機能局面としての欲求充足の問題についての検討が，要請されるに至る。ここでは，現代青少年におけるその問題を，彼らの欲求規制についての考え方を典型的に示すと思われる，経済観念の分析と合わせて，考察することにしたい。

本調査では，この局面に関して先ず最初に**余暇時間の過ごし方**を問うた。**第36表**は高校生，**第37表**は勤労青少年についての集計結果である。前者における発生化を眺めると，「4. テレビ・ラジオ」が約75%と最も多く，次いで「3. 予習・復習・宿題」，「12. 何とはなしに過ごす」，「6. 趣味的なこと」，「5. 読書」の順に多い。「その他の過ごし方」の中では，「休養・寝る」がその半数を占め，その他「散歩」「新聞・週刊誌」「勝負事」「動植物の世話」などがあった。後者の表では，「6. テレビ・ラジオ」が最も多くて56%，以下「5. 趣味的なこと」，「7. 友人と遊ぶ」，「3. スポーツ・娯楽」，の順になっている。「その他の過ごし方」の中には，「アルバイト・内職」，「家事手伝・自炊」，「休養・寝る」，「散歩」，「夜間大学」などが含まれる。両表を比較すると，ともに「テレビ・ラジオ」が最大であることは別にして，第二位が，高校生では学校の勉強の予習・復習であるのに対して，勤労青少年では自分の趣味を満足させることであるのは対照的である。しかし趣味については，両グループはほぼ同じ発生比を示している。なおここで特に注意を要すること

第36表　余暇時間の過ごし方（高校生）

	実数	発生比 %
1. クラブ活動・自治会	173	28.31
2. 受験勉強（塾・家庭教師によるものを含む）	119	19.48
3. 学校での勉強の予習・復習・宿題	361	59.08
4. テレビ・ラジオ	456	74.63
5. 読書	204	33.39
6. 趣味的なこと	244	39.93
7. スポーツ・娯楽	89	14.56
8. 商売や家事の手伝（含アルバイト）	112	18.33
9. 何かのグループ，会に参加	25	4.09
10. 友人と遊ぶ	121	19.80
11. 講習（運転免許や珠算等）・おけいこごと	48	7.86
12. 何とはなしに過ごす	284	46.48
13. その他の過ごし方	28	4.58
不明・その他	1	0.16
N.A.	4	0.65
集計者数	N＝611	100.00

第37表　余暇時間の過ごし方（勤労青少年）

	実数	発生比 %
1. 定時制高校・通信教育	29	9.35
2. 何かのグループ，会に参加	45	14.52
3. スポーツ・娯楽	90	29.03
4. 読書	71	22.90
5. 趣味的なこと	120	38.71
6. テレビ・ラジオ	173	55.81
7. 友人と遊ぶ	101	32.58
8. 講習（運転免許や珠算等）・おけいこごと	55	17.74
9. 何とはなしに過ごす	44	14.19
10. その他の過ごし方	15	4.84
不明・その他	0	0
N.A.	4	1.29
集計者数	N＝310	100.00

は，勤労青少年では14%に過ぎない「何とはなしに過ごす」という項目が，高校生では46.5%という高率になっている点である。これは，高校生が勉強に可成りの時間をとられながらも，なお無為に過ごすだけの余裕があるということなのか，それとも，生活組織化に対する切実性と真剣味に欠けるということなのだろうか。ついでながら，この無為者を卒業後の予定進路とクロスさせてみると，就職組47.71%，家業・家事の手伝組42.86%，進学組 46.57%，その他のコース組47.06%，という発生比を示し（各進路者を100%とする），したがってどのコースについてもほぼ同じ割合で無為者が居ることが判る。無為者についての傾向とは逆に，「スポーツ・娯楽」に関しては，勤労青少年が高校生の約二倍の発生比を示している。グループ活動や講習，友人との交遊についても，勤労青少年の方が高い。しかし読書時間は，高校生の方が多いようである。高校生では受験準備ということが，すでに第16表でみたように，第一の関心事であるにもかかわらず，実際にそのために時間を割く者が20%弱と比較的少ないのは，調査対象者が未だ二年生だということによるのだろうか。余暇時間の過ごし方に関しては，高校生における無為者の率が相当に高いこと，また勤労青少年における「スポーツ・娯楽」「友人との交遊」の率が比較的高いことが，その生活組織化を建設的に進める上で，何らかの問題性を孕むようにも思える。

ところで両グループとも最高の発生比を示している「テレビ・ラジオ」については，特にテレビに関しては，さらにその視聴状況（時間数と愛好番組）が調べられた。**第38表**は，**視聴時間**の分布を示している。高校生・勤労

第38表　テレビ視聴時間（%）

時間数	高校生	勤労青少年	計
0.5 時間未満	2 (0.33)	1 (0.32)	3 (0.33)
0.5 ～ 1 時間	16 (2.62)	7 (2.26)	23 (2.50)
1 ～ 1.5 時間	73 (11.95)	38 (12.26)	111 (12.05)
1.5 ～ 2 時間	55 (9.00)	10 (3.23)	65 (7.06)
2 ～ 3 時間	208 (34.04)	104 (33.55)	312 (33.88)
3 ～ 4 時間	157 (25.70)	91 (29.35)	248 (26.93)
4 ～ 5 時間	59 (9.66)	30 (9.68)	89 (9.66)
5 時間以上	25 (4.09)	10 (3.23)	35 (3.80)
不明・その他	7 (1.15)	8 (2.58)	15 (1.63)
N.A.	9 (1.47)	11 (3.55)	20 (2.17)
計	611 (100.01)	310 (100.01)	921 (100.01)

第39表　好きなテレビ番組（発生比%）

番組内容	高校生	勤労青少年	計
1. ニュース・ニュース解説	18 (2.95)	19 (6.13)	37 (4.02)
2. 教養番組（記録・科学・風物地誌・講座等）	55 (9.00)	18 (5.81)	73 (7.93)
3. 趣味・スポーツ・音楽・ワイドショー等	106 (17.35)	50 (16.13)	156 (16.94)
4. ドラマ・映画	441 (72.18)	171 (55.16)	612 (66.45)
5. 娯楽番組（クイズ・ポピュラー音楽・ショー・寄席・マンガ等）	234 (38.30)	94 (30.32)	328 (35.61)
不明・その他	1 (0.16)	23 (7.42)	24 (2.61)
N.A.	80 (13.09)	65 (20.97)	145 (15.74)
集計者数	N=611	N=310	N=921

青少年ともに2～3時間がモード並びにメディアンである。次いで多いのは3～4時間で，2～4時間に全体の約六割が集中していることになる。

愛好する番組を具体名で記入させ，それを内容別に分類したのが，**第39表**である。高校生・勤労青少年とも，「4. ドラマ・映画」が最も多い発生比を示し，次いで「5. 娯楽番組」が30％台を示す。それらの中では，高校生については，「青春とは何んだ」「七人の孫」「ただいま11人」「事件記者」「ナポレオンソロ」「0011」「コンバット」「源義経」「逃亡者」「オバQ」「勝ち抜きエレキ合戦」「バークレー牧場」「三匹の侍」「てなもんや三度笠」「ひょっこりひょうたん島」などに，また勤労青少年においては，「判決」「逃亡者」「0011」「おばQ」「プロポーズ作戦」「ニューエレキサウンド」「七人の刑事」「青春とは何んだ」「エレキサイトショー」「ザ・ヒット・パレード」「氷点」「アップ・ダウンクイズ」「ザ・ガードマン」「11ＰＭ」「悪の紋章」「事件記者」などに人気がある。

さてそこで，このような青少年たちの余暇利用形態を念頭におきながら，彼らが現在最も為したいと思っている**生活欲求**について眺めてみよう。「あなたが今いちばんしたいことは何ですか」という問に対する自由回答を類別化したのが，**第40表**（高校生），**第41表**（勤労青少年）である。前者では，3. 4. 1. が比較的大きい発生比を示している。1. では，「勉強」「読書」「自分の人間形成」をしたい，「自由な時間がほしい」「高校生活を有意義に送りたい」「規則正しい生活をしたい」などがある。2. では，「同性・異性の友達がほしい」「恋愛・デイトをしたい」「サークルを作りたい」などが主になる。3. では，「旅行をしたい」が78名（12.77％）あり，その他「スポーツ」「海外旅行」「キャンプ」「登山」「冒険」などが挙っている。4. に関しては，「寝たい」「十分休養したい」「自由に遊びたい」「趣味に時間を使いたい」などが多く，また「単車でとばしたい」「思いきりどなりたい」「ダンス」「パチンコ」「マンガ」「映画」などもある。第41表においては，N. A. が四割もあったため，全般的にパーセントは小さいが，3. 5. 4. な

第40表　生活欲求(高校生)

	実数	発生比％
1.勉強・生活内容の改善，等	132	21.60
2.人間関係（友人・グループ活動，等）	49	8.02
3.リクリエーション（スポーツ・旅行，等）	177	28.97
4.緊張緩和（娯楽・趣味，等）	146	23.90
5.その他の欲求	29	4.75
不明・その他	42	6.87
N.A.	169	27.66
集計者数	N＝611	100.00

第41表　生活欲求(勤労青少年)

	実数	発生比％
1.仕事・生活内容の改善，等	28	9.03
2.人間関係（友人・グループ活動，等）	12	3.87
3.リクリエーション（スポーツ・旅行，等）	46	14.84
4.緊張緩和（娯楽・趣味，等）	32	10.32
5.その他の欲求	44	14.19
不明・その他	33	10.65
N.A.	130	41.94
集計者数	N＝310	100.00

どが多い。1.の仕事などに関しては，「専門技能の習得」「やりがいのある仕事をしたい」「精力的に働きたい」「政治活動をしたい」「自分の店を持ちたい」など，勤労青少年の積極的な生活意欲が窺われる。2.については，「異性の友がほしい」「恋愛」などが多く，「親と同居して孝行したい」というのも一例あった。3.では，高校生同様，「スポーツ」「旅行」などに集中している。4.のテンション・リダクションの領域では，「ロードレース用の高速車に乗りたい」の他は，高校生と同じ傾向が見られる。5.においては，「勉強」「読書」「教養を身につける」「免許状取得」など学習意欲が盛んであるが，また一方，「結婚したい」「家を建てる」「おけいこごと」「別居・一人部室」などの切実な欲求も存在する。全体として見れば，当該青少年の生活欲求の構造は，比較的健全であるといえよう。

しかしながら，いかにその欲求構造が健全であっても，それを充足せしめる実際の方法ないしは充足様態が妥当なものでなければ，それは生活組織化に対して必ずしも順機能を果さないであろう。そこで次に，そうした充足の実際的な方法として最も重要な，金銭というものについての考え方，また買物の仕方について，調べてみた。先ず第一段階として，高校生には小遣額，勤労青少年には収入額とその使途を尋ねた。**第42表**は**高校生の小遣額**の一覧であるが，モードは1,000～1,499円，メディアンは1,500～1,999円である。月額2,500円までの者を合わせると全体の八割強となり，5,000円以上の高額者は1.15%にすぎない。他方，**第43表**に示された**勤労青少年の月収額**では，15,000～19,999円がモードでもメディアンでもある。25,000円までで全体の約87%がカバーされる。結局こうした事実から，小遣いにおいても，月収額においても，それぞれの生活欲求がすべて満たされうるほどの金額を得ている者は，極めて少数であることが知られよう。

第42表　小遣額（高校生）

月額	実数	%
500円以下	9	1.47
500～999円	35	5.73
1,000～1,499円	242	39.61
1,500～1,999円	128	20.95
2,000～2,499円	99	16.20
2,500～2,999円	16	2.62
3,000～4,999円	26	4.26
5,000円以上	7	1.15
不明その他	34	5.56
N.A.	15	2.45
計	611	100.00

第43表　月収額（勤労青少年）

	実数	%
10,000円以下	3	0.97
10,000～14,999円	53	17.10
15,000～19,999円	157	50.65
20,000～24,999円	56	18.06
25,000～29,999円	17	5.48
30,000～34,999円	7	2.26
不明その他	5	1.61
N.A.	12	3.87
計	310	100.00

なお勤労青少年の場合，その得た収入を，「家に入れる」「貯金」「小遣」に，それぞれ何パーセントぐらいずつあてているかを調べた結果が，**第44表**に示される。各**使途の割合**のパーセントは，各使途の具体額を当人の収入額で割って算出した。この表を眺めると，「家に入れる」は

30〜39%が，「貯金」は10〜19%が，「小遣」は20〜29%が，それぞれモードであることが判る。したがってモデルマンは，大体のところ，全収入の35%を家に入れ，15%を貯金し，25%を小遣に廻わし，残りの25%を生活必要経費（通勤交通費・衣服費・昼食代，等）に当てているのではないか，と推測される。こうした標準的な使途割合は，保護者と同居している者が70%を占める（第7表参照）当該サンプルにおいては，十分可能であろう。全体の67%ぐらいの者は収入の40%以内を貯金しているが，それとは反対に，収入の60%以上を小遣にしている者が約6%も存在することは注目されてよい。だが全般的にみると，勤労青少年の収入の使途には，さほどの問題性は存しないように見受けられる。

さてしかし現代青少年は，その生活欲求の直接的な充足手段としての金銭を，どのようなものと考えているのだろうか。彼らの**金銭観**を知るために，A・B・Cという三人の人間の意見を示し，そのどれに一番近

第44表　収入の使途（勤労青少年）（%）

使途／割合	家に入れる	貯金	小遣
収入額の10%以内	6 (2.05)	22 (7.51)	5 (1.71)
10 〜 19 %	24 (8.19)	74 (25.26)	56 (19.11)
20 〜 29 %	35 (11.95)	69 (23.55)	101 (34.47)
30 〜 39 %	43 (14.68)	30 (10.24)	42 (14.33)
40 〜 49 %	31 (10.58)	12 (4.10)	20 (6.83)
50 〜 59 %	20 (6.83)	8 (2.73)	13 (4.44)
60 〜 89 %	27 (9.22)	8 (2.73)	14 (4.78)
90 % 以上	0	0	3 (1.02)
不明その他	41 (13.99)	27 (9.22)	14 (4.78)
N.A.	66 (22.53)	43 (14.68)	25 (8.53)
計※	293 (100.02)	293 (100.02)	293 (100.00)

※　計の293は，被調査者310より，月収額の不明その他およびN.A.17を引いた数

第45表　金　銭　観（%）

タイプ	高校生 男	高校生 女	高校生 性別不明	高校生 小計	勤労青少年 男	勤労青少年 女	勤労青少年 性別不明	勤労青少年 小計	計
貯蓄型（A君の意見）	134 (35.36)	102 (44.16)	0	236 (38.63)	107 (55.15)	67 (66.34)	7 (46.67)	181 (58.39)	417 (45.28)
消費型（B君の意見）	177 (46.70)	91 (39.39)	0	268 (43.86)	66 (34.02)	25 (24.75)	5 (33.33)	96 (30.97)	364 (39.52)
無関心型（C君の意見）	49 (12.93)	14 (6.06)	1 (100.00)	64 (10.47)	16 (8.25)	7 (6.93)	2 (13.33)	25 (8.06)	89 (9.66)
不明その他	8 (2.11)	2 (0.87)	0	10 (1.64)	1 (0.52)	1 (0.99)	1 (6.67)	3 (0.97)	13 (1.41)
N.A.	11 (2.90)	22 (9.52)	0	33 (5.40)	4 (2.06)	1 (0.99)	0	5 (1.61)	38 (4.13)
計	379 (100.00)	231 (100.00)	1 (100.00)	611 (100.00)	194 (100.00)	101 (100.00)	15 (100.00)	310 (100.00)	921 (100.00)

〔高校生・男女間〕
d.f.=2　$Pr(\chi^2 \geqq 9.072) = 0.01 \sim 0.02$
〔不明その他およびN.A.性別不明を除く 3×2分割表による〕

〔勤労青少年・男女間〕
d.f.=2　$Pr(\chi^2 \geqq 2.592) = 0.20 \sim 0.30$
〔不明その他およびN.A.性別不明を除く 3×2分割表による〕

〔高校生・勤労青少年間〕
d.f.=2　$Pr(\chi^2 \geqq 62.640) \ll 0.001$
〔不明その他およびN.A.を除く 3×2分割表による〕

いかを答えさせた。それらの意見というのは，次のようなものである。

A君……「お金はいざというときに必要なものであるから，むだづかいをせずに，将来にそなえて，できるだけ貯金しておく。」

B君……「好きなときに好きなものが買えるのがお金のねうちなのだし，将来のことといっても，どうなることか分らないのだから，買いたいものがあれば，その時の気分で思いきって買う。」

C君……「人生において，お金はそれほど重要ではないのだから，お金のことなどは気にかけず，仕事や勉強を一生懸命にする。」

A君の意見というのは貯蓄型，B君C君のは，それぞれ，消費型，無関心型（インディファレント）と名付けることにしよう。**第45表**は，各型の分布状態を示すものである。

全体としては，貯蓄型（45.28%）が消費型（39.52%）に優り，無関心型は10%にも足りない。高校生と勤労青少年とでは，かなり分布が違う。高校生の場合，消費型が貯蓄型を上廻るのに対し，勤労青少年では，分布は全く逆になって，貯蓄型は消費型の約二倍も存在する。両グループ間で分布の一様性に関する x^2 検定を行なうと，危険率0.001以下で有意差があった。性別についてみると，高校生において，消費型は男の方が，貯蓄型は女の方が多く，また無関心型については，男は女の二倍の比率になっている。両者間で検定すると，危険率0.02で有意差があった。勤労青少年においては，男女ともに貯蓄型の方が多いが，消費型との比率を考えると，男は消費型の1.6倍であるのに対し，女は2.7倍にも達する。だがこの場合，性差を検定したところ，有意差は認められなかった。しかし高校生・勤労青少年を通じて，男は消費型的傾斜を示し，女は貯蓄型的傾向を示すということは言えそうである。金銭観について留意すべきことは，勤労青少年は実生活的体験から，貯蓄が望ましいと考える者が多いのに対し，高校生では欲望のコントロールが時にはきかなくなるような，消費型金銭観を持つ傾向が強いということである。この点は，生活組織化の成否に直接連なるものとして，特に重要である。

そこで高校生の場合，その金銭観をさらに深く知るため，小遣額とのクロスをとってみた。その際，消費型は小遣額が多くなるほど増えるだろう，ということが予想される。**第46表**は，両者のクロス集計から作られた x^2 検定のための分割表である。この表を眺めると，無関心型は，小遣額1,500〜1,999円で最小のパーセントを示し，両端でそれぞれ大きくなるという傾向にあるが，消費型は仮説通り，1,000円以下で最低で，金額を増すにつれて高くなり，2,500円以上のクラスで最高となる。他方，貯蓄型は，それと全く逆で，1,000円以下で最高の59%を示し，金額の増加とともに減少して2,500円以上では最低になる。この傾向の対

第46表　金銭観と小遣額とのクロス集計分割表（高校生）（%）

金銭観＼小遣額	1,000円以下	1,000〜1,499円	1,500〜1,999円	2,000〜2,499円	2,500円以上	計
貯蓄型	26 (59.09)	102 (45.54)	49 (41.53)	33 (36.26)	11 (24.44)	221 (42.34)
消費型	13 (29.55)	97 (43.30)	61 (51.69)	51 (56.04)	30 (66.67)	252 (48.28)
無関心型	5 (11.36)	25 (11.16)	8 (6.78)	7 (7.69)	4 (8.89)	49 (9.39)
計	44 (100.00)	224 (100.00)	118 (100.00)	91 (99.99)	45 (100.00)	522 (100.01)

d.f.=8　$Pr(\chi^2 \geqq 15.660)=0.02 \sim 0.05$

照はまことに鮮かであり，x^2検定の結果でも，危険率5％で明らかに有意差が認められた。さらにまた，高校生については，保護者の構成形態（第4表参照）とのクロス集計についても検定を試みたが，有意差はなかった。

他方，勤労青少年の場合には，金銭観が年令によって違ってくるだろう（例えば，若年者ほど消費型が多いだろう）と考えて，検定のための分割表，**第47表**を作製した。同表では，高校生と同じ年令層の「17才以下」で，消費型の比率が41％と最も大きいが，他年令層に大した開きはなく，また貯蓄型も18〜19才で一番大きいパーセントを示すだけである。無関心型は高年令層に多い。x^2 検定の結果では，しかしながら有意差はない。なお勤労青少年の場合，金銭観と保護者の構成形態および居住形態（第7表参照）との間には，何らの連関も認められなかった。

以上の分析から，金銭観によって代表されるような現代青少年の経済観念がいくらか明らかになったが，さらにそれをより明確にするため，そのような価値観と密接に結びつく，**物品の購入法**について調べた。調査票における質問とその回答選択肢は，次のようになっている。

「あなたは何か少し高いものを買いたくなったとき，たいていどのようにしていますか。一つだけ番号を○でかこんで下さい。」

（高　校　生）

1. 貯金をおろして買う。
2. 親にねだって買ってもらう。
3. 親やその他のだれかに立替えてもらって，あとで月月のこづかいなどの中から返す。
4. 自分でアルバイトして費用をつくる。
5. 買える額までこづかいをためる。
6. その他（　　）

（勤労青少年）

1. 貯金をおろして買う。
2. 月賦やクーポン券で買う。
3. 質に入れて金をこしらえる。
4. 友達などから借金をする。
5. 給料を前借りして買う。
6. 次の給料日までしんぼうする。
7. その他（　　）

第48表（高校生），**第49表**（勤労青少年）は，それぞれこの問に対する回

第47表　金銭観と年令とのクロス集計分割表（勤労青少年）（％）

金銭観＼年令	17才以下	18〜19才	20〜22才	23〜26才	計
貯蓄型	29 (53.70)	56 (70.89)	69 (56.56)	16 (55.17)	170 (59.86)
消費型	22 (40.74)	22 (27.85)	39 (31.97)	8 (27.59)	91 (32.04)
無関心型	3 (5.56)	1 (1.27)	14 (11.48)	5 (17.24)	23 (8.10)
計	54 (100.00)	79 (100.01)	122 (100.01)	29 (100.00)	284 (100.00)

d. f.＝6　$Pr(\chi^2 \geqq 12.212) = 0.05 \sim 0.10$

第48表　高価品の購入方法（高校生）（％）

方法＼性別	男	女	性別不明	計
1.貯金を下ろす	47 (12.40)	27 (11.69)	0	74 (12.11)
2.親にねだる	80 (21.11)	109 (47.19)	1 (100.00)	190 (31.10)
3.親などに一時立替えてもらう	43 (11.35)	17 (7.36)	0	60 (9.82)
4.アルバイトで費用を作る	62 (16.36)	15 (6.49)	0	77 (12.60)
5.小遣をためる	97 (25.59)	46 (19.91)	0	143 (23.40)
6.その他の方法	13 (3.43)	2 (0.87)	0	13 (2.13)
不明その他	34 (8.97)	13 (5.63)	0	47 (7.69)
N.A.	3 (0.79)	2 (0.87)	0	5 (0.82)
計	379 (100.00)	231 (100.01)	1 (100.00)	611 (99.99)

答をまとめたものである。前者では，「2. 親にねだる」が最も多く，次いで「5. 小遣をためる」が多い。後者では，「6. 次の給料日まで待つ」という欲求延期が最も多くて，その次には「1. 貯金をおろす」「2. 月賦・クーポンの利用」がくる。これらの諸方法を，欲求充足における態度という観点から分類すれば，欲求制御的ないしは計画的購入法（高校生—1. 4. 5. 勤労青少年—1. 6.）と，欲求即時充足的購入法（高校生—2 3，勤労青少年—2. 3. 4. 5）とに分けられよう。[33] もちろん第三に，その他の諸方法（親に半分出してもらう，お年玉を期待する，等）をとる型もある。そこでこうした購入態度のタイプごとにどのような分布をしているかをまとめたのが，**第50表**である。まず性別での違いをみる

第49表　高価品の購入方法（勤労青少年）（%）

方法＼性別	男	女	性別不明	計
1.貯金を下ろす	36 (18.56)	23 (22.77)	3 (20.00)	62 (20.00)
2.月賦・クーポン利用	48 (24.74)	8 (7.92)	4 (26.67)	60 (19.35)
3.入質	3 (1.55)	0	0	3 (0.97)
4.友達などから借金	2 (1.03)	4 (66.67)	0	6 (1.93)
5.給料前借	1 (0.52)	0	0	1 (0.32)
6.次の給料日まで待つ	80 (41.24)	50 (49.50)	6 (40.00)	136 (43.87)
7.その他の方法	9 (4.64)	10 (9.90)	2 (13.33)	21 (6.77)
不明その他	14 (7.22)	6 (5.94)	0	20 (6.45)
N.A.	1 (0.52)	0	0	1 (0.32)
計	194 (100.02)	101 (99.99)	15 (100.00)	310 (99.98)

第50表　高価品の購入態度の性別クロス集計分割表（%）

購入態度＼性別	高校生 男	高校生 女	高校生 小計	勤労青少年 男	勤労青少年 女	勤労青少年 小計	計
欲求制御・計画型（高）—1.4.5.（勤青）—1.6.	206 (60.23)	88 (40.74)	294 (52.69)	116 (64.80)	73 (76.84)	189 (68.98)	483 (58.05)
欲求即時充足型（高）—2.3.（勤青）—2.3.4.5.	123 (35.96)	126 (58.33)	249 (44.62)	54 (30.17)	12 (12.63)	66 (24.09)	315 (37.86)
その他の方法をとる型	13 (3.80)	2 (0.93)	15 (2.69)	9 (5.03)	10 (10.53)	19 (6.93)	34 (4.09)
計	342 (99.99)	216 (100.00)	558 (100.00)	179 (100.00)	95 (100.00)	274 (100.00)	832 (100.00)

〔高校生・男女間〕
d. f.＝2　$Pr(\chi^2 \geqq 26.784) < 0.001$
〔高校生・勤労青少年間〕
d. f.＝2　$Pr(\chi^2 \geqq 23.296) < 0.001$
〔勤労青少年・男女間〕
d. f.＝2　$Pr(\chi^2 \geqq 10.686) = 0.001 \sim 0.005$

33)　「貯金を下ろす」という方法は，即時充足的なやり方にみえるが，実際はそれ以前から，潜在的にないしは計画的に，購入を意図して預金していたのであるから，計画型に入る。また「親にねだる」という方法は，たんに親に依存的であるという意味にも解されるが，しかし少なくとも，自分の購入欲求の延期ないしは制御を行なわないという意味では，即時充足型に属する。

と，高校生では，男の方に欲求制御・計画型が多く，女の方に即時充足型が多い。検定の結果，危険率0.001以下で有意差がある。勤労青少年では，逆に欲求制御・計画型は女の方に多く，即時充足型は男の方に多い比率が出ている。検定の結果も，危険率0.005で有意差のあることを明らかにしている。高校生と勤労青少年との間で比較すると，欲求制御・計画型は勤労青少年の方が，また即時充足型は高校生の方が，それぞれ高いパーセンテイジを示している。χ^2 検定を行なうと，両者間に危険率0.001以下で有意差が認められた。全体としては，欲求制御・計画型の方が優位に立つ。

ところで，高価品の購入に対する態度におけるこのような傾向を，第45表で示された金銭観の分布と関連づけて眺めてみると，すなわち，欲求制御・計画型が貯蓄型と，また即時充足型が消費型と，それぞれ対応するものだと仮りに考えるなら，高校生では，こうした対応は成立しないで，男女の比率上の大小は両表で完全に逆になっている。しかし勤労青少年の場合は，両表は対応しており，欲求制御・計画型と貯蓄型は，ともに女の方が比率の上で多いし，即時充足型と消費型はともに男の方が多い。また高校生・勤労青少年間においても，両表間に上記のような対応関係が成立する。そこで，この購入態度と金銭観との間に連関があるかもしれないと思って，両者のクロス集計を行なった結果が，**第51表**である。しかしながら，高校生についても，勤労青少年についても，分布にほとんど違いは見られず，両者は互に独立であった。

第51表　高価品の購入態度と金銭観とのクロス集計分割表（%）

購入態度＼金銭観	高校生				勤労青少年			
	貯蓄型	消費型	無関心型	計	貯蓄型	消費型	無関心型	計
欲求制御・計画型	128 (58.45)	124 (49.40)	28 (51.85)	280 (53.44)	120 (70.18)	59 (64.84)	14 (70.00)	193 (68.44)
欲求即時充足型	85 (38.81)	121 (48.21)	25 (46.30)	231 (44.08)	38 (22.22)	25 (27.47)	5 (25.00)	68 (24.11)
その他の方法をとる型	6 (2.74)	6 (2.39)	1 (1.85)	13 (2.48)	13 (7.60)	7 (7.69)	1 (5.00)	21 (7.45)
計	219 (100.00)	251 (100.00)	54 (100.00)	524 (100.00)	171 (100.00)	91 (100.00)	20 (100.00)	282 (100.00)

〔高校生〕 d.f.=4　$Pr(\chi^2 \geqq 2.096)=0.70 \sim 0.80$

〔勤労青少年〕 d.f.=4　$Pr(\chi^2 \geqq 1.113)=0.80 \sim 0.90$

高校生については，さらに小遣額とのクロス集計を行なったが，分布に関して有意差は認められなかった。勤労青少年については，年令とのクロス集計表も得たが，ここでも分布はほぼ一様であった。また就業年数とのクロス集計においても，有意差は見当らなかった。ただしかし，**第52表**として示した転職回数とのクロス集計分割表では，転職2回以下では，欲求制御・計画型が多く，3回以上の転職者には，欲求即時充足型が多かった。x^2 検定の結果，危険率0.01で有意差があった。このことは，数多い転職が仮りに生活の非組織化傾向の一つの表われであるとすれば，欲求の即時的充足という態度が，それと何らかの連関を持つことを示唆するであろう。

以上のような分析から，現代青少年の生活構造における欲求充足的機能局面の諸特徴がいくらか明らかになったが，その要点と問題点とをここでまとめてみよう。〝テレビっ子〟ならぬ〝テレビ青少年〟となっている現代青少年は，その肥大化・凡俗化されがちな生活欲求を充足せしめる手段としての金銭に対し，消費的に眺める傾向がかなり強く（特に高校生），また物品購入の態度においても，欲求即時充足型の占める比率も相当に大きい。こうしたところに，欲求とその充足手段との不均衡が生じる可能性があると思われ，その生活組織化に及ぼす影響が懸念されるのである。

第52表　高価品の購入態度と転職回数とのクロス集計分割表（勤労青少年）（%）

態入購度＼転職回数	0　回	1・2回	3回以上	計
欲求制御・計画型	150 (68.49)	42 (77.78)	5 (33.33)	197 (68.40)
欲求即時充足型	50 (22.83)	11 (20.37)	9 (60.00)	70 (24.31)
その他の方法をとる型	19 (8.68)	1 (1.85)	1 (6.67)	21 (7.29)
計	219 (100.00)	54 (100.00)	15 (100.00)	288 (100.00)

d. f.=4　$Pr(\chi^2 \geqq 13.536)=0.005 \sim 0.01$

5　調査のまとめと問題点

京都市内の高校生と勤労青少年，合わせて約900名に対して行なった上述の調査は，現代社会における青少年の生活組織化状況を，その生活態度と価値観の分析を通して明らかにすることを目的としていた。それらの態度と価値は，実際には生活構造の四つの機能局面（人的環境への適応，生活目標の達成，規範への同調，欲求充足）において追究され，それぞれにおける特徴が指摘された。それらの諸機能要件に関して全体的に眺めると，現代青少年は，(1)適応については，あまり問題はない。(2)目標達成については，生活設計の組織度の低さ，適応主義的生活態度，就職動機の消極性，等に問題点を残している。(3)規範への同調の領域においては，B. M. T. の「欲求肯定的態度」が多いことを除けば，まずまず健全な状況にある。(4)欲求充足については，消費的金銭観，即時充足型が比較的多く（これは(3)の「欲求肯定的態度」の多さと密接に連関すると考えられる），この点，生活構造の確立に対する逆機能がやや心配される。これらの傾向は，生活の非組織化過程に在る非行少年の資料と比較すれば，より鮮明に分析されるであろうが，それは今後の研究課題として残される。ともかく，当該の調査対象者の生活組織化に関する限り，強烈な大衆社会化の嵐の中に在って，その内面構造（価値と態度）を比較的健全に保ち，まずはよく機能しているといえよう。しかしそれが全日本的レベルにおいては，果してどうであろうか。本調査研究に対する反省と批判をもとにして，さらに研究を深く進めたいと願っている。

〔附　記〕

本研究は，総合研究「青少年の人格形成の総合的研究」における，重松俊明教授との共同分担課題「現代社会における青少年の生活構造の実証的研究」の報告である。研究は，重松教授の指導の下に，筆者ならびに，研究協力者として参加した，徳岡秀雄〔(元)京都家庭裁判所調査官補，(現)愛知県立大学助手〕，森莞治〔大阪家庭裁判所調査官補〕両氏をスタッフとして進められた。なお調査実施にあたり御協力と有

益な助言を賜わった，京都市立塔南高等学校，森藤吉校長，宮木亮康，北尾孝義，梅田順一各教諭，および京都府中小企業指導センター，射場　衛氏，京都機械工具株式会社，羽根祥夫氏，京食株式会社，北川荘一氏，黒井電機株式会社，木下大蔵氏，株式会社佐野紙芸，佐野義男氏に対し，ここに謹んで感謝の意を表する。また資料の集計分析に尽力してくれた，角屋律子さんや京都大学教育学部学生の，府川満晴，森雅城，奥井祥夫，左近勝利らの諸君にも心から感謝したい。